

1



0057022-000

396.9-Mo.45ウ

兵召応

森伊佐雄・著

大新社

昭和19

AJF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

兵 召 応

396.9
Mo.45

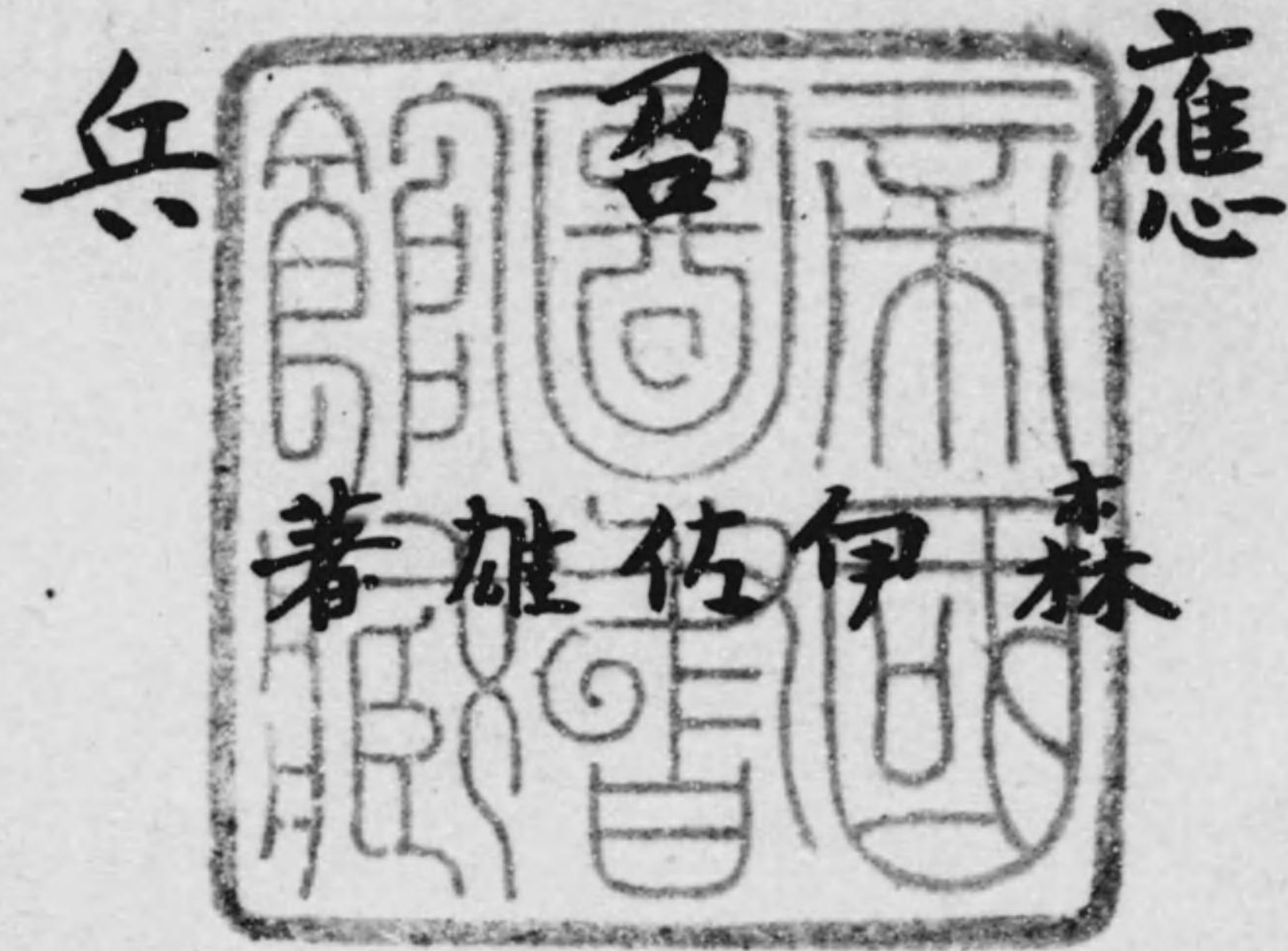
著 雄 佐 伊 森



刊 社 新 大

253^v

396.9
Mo.45



軍民一如

軍民一如といふ言葉がある。如何なる意味であるか私が説明するまでもない事である。今日に至つては前線も銃後もない。常在戦場である。私は第二補充兵として、半ば断念してゐた兵隊となることが出来た。兵營は私のあこがれの庭であつた。どうかして一度は兵隊になつて見たいと思つたが第二補充兵の悲しさ、それも断念せざるを得なかつた。それが私の如き者まで、有難きお召しがあつたのだ。私は軍隊へ入つた。嚴肅で規律正しく、しかもあくまで家族的で、上は下を慈しみ、下は上を敬ふ。私はそこで日本軍人の數々の美しさを見た。私の想像してゐた軍隊とは、何んといふ大きな違ひであつたことだらう。私は軍隊生活をあこがれてゐたが、又軍隊生活に對して可成り大きな誤解もしてゐた。私だけではないかも知れない。私は今満期となつて除隊した。歸つて軍隊生活を顧る時、私は

これから應召されて行く人達に、或は家族の者に、本當の軍隊の内部を知つて頂くことが軍民一如といふ言葉の意味を説明することになると思つた。私は元來が百姓である。百姓の小件が原稿を書いたところで、碌なものが書ける理由がない。しかし私の意欲は、最早靜止してゐなかつた。拙い筆でもよし、たゞ私は有りのまゝを書けばそれでよいのだと考へ、日記帳をたどりながら本書を書くことにした。文章家でないが私が文章を書いたのだから、文法だとか、語法だとか、假名遣ひだとか、恐らく間違ひだらけだと思ふ。しかし下手な小細工をするより真正直にペンを運んだ方が、軍隊のありのまゝを書く上によいと信じた。間違ひや意味の通ぜぬところは御判讀を願ひたい。たゞ私の念願は、このさゝやかな本に依つて軍隊生活が如何に明朗なものであるか、又日本軍隊が世界に冠たる所以が分つて頂ければそれで本望なのだ。軍隊生活を正しく理解し、軍隊生活に深き認識を持つことは、國民の義務であると信ずる。

昭和十八年十一月

著者

— 目 次 —

應 召 の 日……………三

お 召 状 來 る……………三

送 別 の 宴……………九

天 に 代 り て……………一五

愈々 入 隊……………一九

入 隊 式……………一九

忠 誠 を 誓 ふ……………二六

軍 隊 の 一 日……………三三

教官

兵器拜受……………四四
雪中の教練……………四九

軍隊の折々

朝のひと時……………五七
美田候補生……………六六
娛樂會……………七一
國井初年兵……………八〇
戰友……………九〇
理髮……………九五

軍隊日記

……………一〇一

責任感

不覺……………一三五
露營……………一三三
對抗演習……………一四〇
檢閱……………一四七
不寢番……………一五〇
兵器尊重……………一五六
夜間演習……………一六四
行軍……………一七三
立派な死……………一七九

軍隊の味

班長殿……………一八七

夕食の後……………一九四

食事・當番……………二〇三

入浴の失敗……………二一〇

上官の情……………二二五

英靈詣で……………二二五

第一期檢閲……………二三〇

廠舎の午後……………二三七

大學出の中鉢……………二三二

召集解除……………二四一

— 目次終 —

應 召 兵

應召の日

お召状来る

私にお召しの令状が下つたのは、寒い師走の或る日の午後であつた。その日は朝から、かなり空模様が悪く時々雲が落ちてゐた。晝頃からは木枯しが相當強く吹いて、電線にぶつかる度に、無氣味な唸を立ててゐた。

お召しのお達しを手にした時、いひしれぬ感激に私の胸は震へてゐた。

「これで自分も一人前の男だ」

さう言つた様な氣持が胸一つばいに擴がつて来て、實に愉快でならなかつた。私はかねてから、軍隊生活をあこがれてゐた。一生のうちたとへ一ヶ月でもよ

いから、軍隊の飯を食つて見たいと常々思つてゐた。だが第二補充兵の悲しさ、その希望も淡雪の様なものであつた。私は兵隊になることを半ばあきらめてゐた。半ばといふより、寧ろ豫期してゐなかつた。

男と生れて、最も生れ甲斐のあるのは兵隊になることだ。私はさう云ふ氣持を子供の頃から抱いてゐた。私だけではない。誰だつてさうであつたかも知れないが、私の念願は又格別で、何かしら限度を越えて根強いものがあつたのだつた。私の胸の底にはいつもこの氣持がこびりついてゐた。

半ば斷念してゐた私にお召しがあつたのだ。私は夢かとはばかり驚いた。私の驚きは歡喜の驚きであつた。

私の友人の大方は兵隊となつてゐた。或る者は現に大陸の曠野に奮戦してゐる。又或る者は拔群の功をたてて、村人の羨望の的となつてゐる。また或る者は大空の勇士となつて燃ゆるが如き祖國愛をもつて米英軍に巨彈の雨を降らせてゐる。

私は友のさうした戦功を聞く度に、胸の張り裂ける思ひをした。野道を歩く時

でも、向うから勇士の家族の者が來たりする時は、堪へられない寂しさがこみあげて來て、挨拶も碌にしないで逃げる様に立ち去ることもあつた。さうした時の私は、きまつた様に、心の中で獨り泣いてゐたのであつた。

私獨りが置き去りにされてゐる様な氣がして堪へられなかつたのである。

「自分が兵隊であつたら、家の者がどんなに肩身が廣いことだらう」

さう考へると兵隊になれなかつた自分が、腑甲斐なく思へて恨めしくもあつた。或る時、友人の一人が、現役兵として入營したことがあつた。私は驛まで見送つて行つたが、旗の波に埋もれた友人の凜々しい姿にしばし見惚れてゐたこともあつた。萬歳の聲の中で、汽車の窓から半身を乗り出して、一々會釋してゐるその男らしい友の姿が神々しくさへ見えた。私は、その立派な姿にむしろ茫然として見惚れ、挨拶も碌に出來なかつたこともあつた。

戦争は愈々激しくなつて來た。戦線はだん／＼擴がつて來た。お召に應ずる兵隊は日毎にふえるばかりであつた。あの村から、この町からの應召兵とこれが見

送人で、小さな驛は雑沓をきはめてゐた。

自分の腑甲斐なさに引きかへ、應召兵は何れも元氣一つばいに勇躍壯途につくのであつた。私は出来るだけ都合して見送りをして上げた。今はもう、見送ることが私のせめてもの慰めであつた。

黒煙を後に走り去る汽車の姿が見えなくなるまで、ホームに立つてゐる私は、驛員に注意されて初めて家路につくこともあつた。さうした時の私の氣持は、そんな時に限つて愈々暗く、愈々重かつたのである。

しかし、さうした苦しみも、悩みも、すべて消え去る時が來た。それは私にもお召しが下つたからである。

「間違ひぢやないかしら」

令状を受取る時、私はそんな氣がしたので、改めて自分の名前を見直した。間違ひではない、確かに自分のものだ、と確認した時、私の心は初めて澄み渡つて來た。何かしらグツと熱いものがこみ上げて來た。押せば倒れさうな私にも、こ

んな逞しい力があつたのかと、自分の身體に新発見でもしたかのやうに思へた。

私は靜かに署名して、力をこめて捺印した。役場の人は、私のあまりにも緊張してゐる有様を見て、たゞ、

「お目出度う、御苦勞様です」

と云つて出て行つた。

外は相變らず木枯しが強く吹いてゐる。

父は所用で出かけて留守だつた。母は私と役場の人との應待を見てぼんやりしてゐた。母にしてみれば、全く豫想外のことだつたのだらう。第二補充の私にお召しが來るなんて考へても見なかつたことだらう。強ひて考へたとすれば、それは戦争が容易ならぬ段階に入つた時だと思つたに違ひない。

「よかつたね」

餘程たつてから、母はたゞさう言つただけである。私は母の氣持を亂すまいとして、たゞ黙つて頭を下げた。

夕方になつて歸つて來た父は、母からその事を聞かされて、さも満足さうに、につこりと頷いた。神棚を綺麗に掃除して、自らマッチを摺つてお燈明を上げた父は、私からとつた令狀を、その神棚に上げて拍手を打つて、何やら口の中でいつてゐた。母はその後ろに坐つて、手を合せて、父と同じ様に口の中で、何やら稱へてゐた。私は、兩親のさうした御祈りが、私の武運長久をお祈りする祈りだとは思はなかつた。私が一人前の男として、お國のために盡すことが叶つたことを、神様に御禮を申し上げてゐるのだと思つた。父母の恩は山よりも高く海よりも深しとは豫ねて教はつた事だが、今、父母のさうした姿を面のあたり拜する時に、私はこの眼ではつきりと、父母の慈愛を見たのである。私はいひしれぬ感動にうたれた。思はず知らず、母の傍に坐つて神様にお禮を申し上げた。

畏多いことながら、教育勅語に、

一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ

と仰せられてゐる。義勇公に奉する時は今だ。いままで、可成御多くの偉い人の

講演を聞いた。戰陣訓も讀んだ。その都度感激して自ら力んだこともあつた。だが小學校の折から、教へられた教育勅語の御言葉が、今日程、力強く、私の胸に甦つたことは、かつて一度もなかつた。

「義勇公に奉するは今だ」

萬代不變のありがたき、教育勅語の御言葉を幾度も頭の中で繰返した。

送 別 の 宴

出發を二三日前にひかへて、私の親しい友達は、私のために送別會を開いてくれた。集まる者六人、私を入れて七人の集りであつた。

夕方から降り出した雪は、夜になつて大降りとなつてしまつた。送別會の會場は村の中程にあるさゝやかな食堂であつた。食堂と云つても一寸した宴會が出来るやうになつてゐた。

私達七人は、狭い六疊の間に通された。薄暗い部屋ではあつたが、それでも床の間には正月の置物らしく、南天と松竹梅とが飾つてあつた。四角な色のあせたテーブルを圍んで薄い座布團が七枚敷いてあつた。

だいぶ古めかしい火鉢が二つ。中に僅かばかりの火が人持ち顔をしてゐた。僅か二つの火鉢、七人に二つでは不足だが、それも、これも戦時色といふのであらう。北滿の荒野に日夜軍務に精勵してゐる友のことを考へれば、たつた二つの火鉢でさへ勿體ない位で、贅澤をいへた義理ではない。

「今晚は、伊佐雄君のために、私達の心からの送別會を開きます……」

一同が座につくと、一番年嵩の友が一同を代表して送別の辭を述べてくれた。平常なら君だ、僕だといふ仲間だが、扱て私の一生一度の晴れの送別會といふので、どことなく堅くなつて、言葉遣ひも丁寧であつた。

「ありがたう御座います」

私は簡単に挨拶をした。長つたらしい、わざとらしい挨拶をいふより、簡単に

御禮を申した方が、この會の雰圍氣を破らすに、私の眞實の氣持ちが判つて貰へると思つたからである。

話は戦場の友の話、或は腕白盛りだつた學童時代の話、それからそれへと花が咲いて行つた。僅かばかりの酒ではあつたが、皆んな飲めぬ口とて、少しの時間に、だいぶ酔つて來た様だつた。こんなにも、分け隔てのない睦しい集りをしたことは、私は生れて初めてであつた。嬉しかった時も、寂しかった時も、共に遊んでくれた友達である。まだこの他に、眞から仲のよい友達が五人あつたが、何れも私より一足お先きに、お召しに應じてゐるのであつた。

私は、元來、酒を口にしなかつた。しかし今宵は友が心から私の出征を祝つてくれる盃なので、一つく有難く頂いたため、すっかり酔が廻つてしまつた。

もう堅苦しい袴は脱ぎすてて、昔の僕だ君だに返つた一同は、酒が廻る程に露營の歌を歌ひ、靖國の歌を歌ひ、愛國行進曲など、大聲に歌ひ出した。

雪は愈々深く、時々ドシリツと竹の枝から落ちる音がきこえて來る。

岩崎は私の最も親しい友人の一人である。小學時代から同級生で、よく喧嘩をやつた仲だつた。母はよく「お前等はあまり仲がよすぎるから喧嘩をするのですよ」などといった位であつた。今宵の私の送別會には、誰よりも先きに來て、私の到着を待つてゐたのであつた。岩崎は私と違ひ、二丈もすつと高く肉付きのよい立派な青年だつた。少年時代の彼は、「大きくなつたら兵隊になるんだ」と口癖の様にいつてゐた。事實、兵隊になることが少年時代の希望であり、夢であつたのだつた。

私と一緒に徴兵検査場に臨んだ時、岩崎だけは甲種合格疑ひなしと思はれた。又自分でもさう信じ切つてゐたらしかつた。それが丙種と宣告された時、岩崎も私達も啞然とした位であつた。胸が悪かつたとの事だが、傍から見るとそんな氣配は少しも見えなかつた。

検査官が丙種だと宣告した時の岩崎の悲しさ、驚きは、私が不合格を宣告された時よりもつと深く深刻なものであつたにちがひない。徴兵官から、「兵隊にな

れなくとも、お國へ御奉公の道はいくらでもある」と慰のお言葉を頂いたが、その時は肯定出來ない程であつたとの事だつた。

その岩崎が、酒の廻つて來るに従ひ、兵隊になれぬのが口惜しいと、何度も何度も繰返していつてゐたが、私にはさうした岩崎の氣持が分るやうな氣がした。友は皆征つた。第二補充兵であつた私にまでお召しがあつたのだ。

私が嘗つてさうであつた様に、岩崎自身も堪へられないのかも知れなかつた。寂しさ、持つてゆきどころのない遣る瀬なさを歌にまぎらはさうとしてゐるのだ。岩崎は無茶苦茶に大聲で歌ひ出した。彼の心の底を知らない者が見たら、酒に酔つたといふより寧ろ狂人に近く見えたかも知れない。

慰めてやりたかつた。然し、次の瞬間、慰めの一言や二言いつたとて、それが却つて不自然に聞えて、岩崎の寂しさを増すばかりだらうと思つた。寧ろ黙つてゐる方が岩崎のためによいのではないかと思つた。

そんなことがあつたので、なんだか座が白けて來た。年嵩の友が、

「さあ、この邊で伊佐雄君の武運を祈つて乾盃しようではないか」

といったので、一同はホツととして、何か解放された様な気がした。

雪は深々と降つてゐる。ぼたん雪は前よりもその輪が大きくなつた様だ。雪は清淨を意味するとか、私は、私の過去に於ける憂鬱な氣持を心から拭き淨め、一意お國のために死なうと堅く、決心をしたのであつた。

七八寸積つた雪は、千鳥足の私達には歩行なく、困難であつた。それなのに岩崎は急に獨りで駆けだしたので一同は吃驚した。大聲で呼んでも、聞えてか聞えないのか振り向かうともせず、恰も猪が突つ走つてゆく様に走つて行つた。

酔のさめた頃には、岩崎はきつと布團の中で哭いてゐたことだらう。私には岩崎の氣持がよくわかつた。

「岩崎、頑張つてくれ。俺が兵隊に行つた後は、貴公が俺のかほりをして出征家族の面倒を見てやつてくれ」

私は心の中でそんなふうにつぶやいた。

天に代りて

愈々今日は應召日だ。珍らしく暖い日だ。先日の雪も殆んど解けてしまつた。だが、故郷の山々はまだ眞白の衣を着てゐる。よい景色だ。子供の時から、この山を友に遊んで來た私は、今朝は特別、その山々がなつかしく思へた。「今日から當分、山にもお別れだ」私はさう思つたすぐ後から、「いや當分ぢやない。或はこれが見納めかもしれない」そんなにも考へて見た。

朝の冷氣は寧ろ、興奮してゐる私には快いものだつた。

出發にはまだ間がある。昨日もお詣りに行つたのだが、も一度と思つて、再び先祖の墓に詣ることにした。お寺は實に立派なものだつた。白壁の堂々たる船形の建物であつた。本堂のすぐ後ろに、色々違つた形をした墓石が立つてゐる。そ

の一番右の隅にあるのが私の家代々の墓である。昨日の御詣りの時に、私はむしろ簡単に御詣りして来たので、今日はゆつくり、自分の思ふことを心のなかでつぶやいて、墓石に向つて、長い間、立つてゐた。何んだか、この墓にも御別れだといふ氣にもなつた。

歸りに本堂の白壁に、墨で落書されてあるのが目についた。私達が小學校の時代にいたづらをして方丈さんに叱られた落書である。幼い追憶が走馬燈の様に私の頭の中を去來した。

日當りの悪い、墓石の裏の方に先日の雪が残つてゐた。

出發の時間は刻々に迫つた。私があまり平然としてゐるので、見送りの人達は驚いてゐたやうだつた。事實、私には勇壯だとか、勇躍だとか、さういふ氣分は湧いて來なかつた。

男子の本分を盡すべく、今ぞ家を立つのだと思ふと、むしろ愉快でたまらなかつた。

つた。

役場の主だつた人が、私のために感激のこもつた激勵の辭を述べてくれた。婦人會の幹部も言葉少くなくに激勵してくれた。

國民學校の代表者が送別の辭を述べてくれた。私はわけもなく、眼頭が熱くなつた。

「誓つて皆様の御期待に副ふやう粉骨砕心致します」

私は簡單ながら、せい一つばい力強くいつた。萬歳の聲が囂々と暫く聞えた。

「では行つて來ます」

愈々行進が始まる時、私は母の傍へ行つてお別れの挨拶をした。

「軀を氣をつけてね……」

母の眼には露の玉が宿つてゐた。いひたいことも澤山あつたのだらう。こんなことなら、もつとく話をしてやればよかつたと私は思つた。眼は口ほどに物をいひとか……母の眼の涙を見た時は、私は生れて初めて、妙に泣きたいやうな氣

に襲はれた。不覺のためではない。悲しみのためでもない。また別れの辛さでもない。生れて初めて味はつた眞實の涙であつたのだ。理窟ではない。獨りでこみあげて來る涙なのだ。

涙を見せてはならないと、私は敢然、見送人の先頭に立つた。

「萬歲、萬歲！」

再び起る歡聲に親類の人達が一齊に頭を下げた。私はたゞ黙つて答禮した。

「天に代りて不義を討つ……」

青年團長の音頭に軍歌が歌ひ出された。行列は今、行進を始めた。

母が小さな妹を脊負つて再び飛んで來た。私はも一度振返つて、母に向つて無理に笑つて見せた。母の顔が妙に歪んで見えた。

私はこれまで幾度か、出征兵士の見送りをした。いくども「天に代りて」を歌つた。今日は皆んなが私のために「天に代りて」を歌つてくれるのだ。國民服に包まれた私の五尺の肉體からは、日本人の血潮が流れて來た。

驛前の廣場は既に隣村の應召兵とその見送人に占領されて大變な雜沓である。

汽車は、先々の驛から乗つた應召兵で満員であつた。それでもどうにか都合して貰つて、漸く窓から頭を出すことが出來た。

「しつかりやれよ！」

岩崎が私の手を堅く握つた。私はなんにもいはずに同じやうに握り返した。

愈々入隊

入隊は午前九時である。

〇〇名位の應召兵は、或る者は國民服で、或る者は肩章のない軍服で、また或る者は鐵道の制服等まちまちであつた。何れも申し合せた様に右の肩から左へかけて日の丸の旗を褰にしてゐた。營門の前の廣場は應召兵と應召兵の附添人で一

つばいだつた。

あちらからも、こちらからも軍歌と萬歳の爆發だ。

私は儼とした歩哨の姿を見た。キリッとした軍服の姿、歩哨は腕に銃をもたせながら鋭い視線で四圍を警戒してゐた。私にはこの一事で軍隊の規律の正しいことを知ることが出来た。これからの軍隊生活を思ひ、嬉しいやうな、それでゐて何か不安なやうな気がしてならなかつた。あれ程あこがれてゐた軍隊生活が、たつた今始まるのだ、何も不安に思ふことはないかと思つては見たが、たゞ何んとなく胸が落ち着かなかつた。私は強ひて平靜を保たうとして大きな深呼吸をして見た。

時間が来た。あこがれの營内に一步を印す時が来た。こゝまで附添つて来てくれた郷里の父に厚く禮をいつた。父は「しつかりやるんだぞ」と力をこめて激勵してくれた。

軍曹殿が大声で應召兵の點呼を始めた。たとへ、まだ軍服は著なくとも、心は

既に軍人だ。軍曹殿の點呼に對しても、力強い、ハッキリした返辭をしてゐた。

聽て軍曹殿に引率されて營門をくゞつた。營庭は實に綺麗に掃き淨められてゐた。清潔整頓のやかましい事は聞いてゐたが、營門をくゞつた瞬間、如何にもその通りだといふ感にうたれた。幾人もの兵隊さんが軍曹殿に敬禮して通り過ぎた。

營庭には大きな櫻の樹があつた。花見時はさぞ見事であらうと思はれるやうな立派な櫻樹であつた。その櫻の木の前に應召兵は整列させられた。やがて聯隊本部の方から伍長殿や軍曹殿など可成り多く出て來られた。後で分つたことだが、何れも各班の班長殿であつた。

私の班は第三内務班で二階にあつた。「これから自分がお前らの班長である」とさういつた若い軍曹殿について二階の第三内務班へ昇つた。

班長殿は目元の涼しい、それでゐてどこか軍人らしく引緊つた口元の二十四、五歳の人であつた。

兵營の中は、がらんとして殺風景であつた。兩側の板壁には防空資材がキチン

と整頓されてあつた。掃除が行き届いてゐるため塵一つ落ちてゐない。部屋の入口には小さな木札に何號室と書いたのがさがつてゐた。窓ガラスには紙が細く切られて×型に貼つてあつた。爆風のための破片よけであらう。

「この室がお前らの班だ」

階段を昇り切つた左側の部屋の前へ來た時、班長殿がさういつた。木の嚴重な扉が二枚立つてゐた。その上部には「復唱復命、實行報告」の八字が貼られてゐた。型にはまつた文字にも軍隊らしいものが窺へた。

バケツが三個きちんと並んでゐる。何れも綺麗な水が満されてゐた。火災防止のためであらう。

班長殿が戸をあけたと同時に、

「上官」

といふ聲が班内から流れて來た。班内にゐた兵隊さんが立ち上つて班長殿に向ひ敬禮をした。

正面に煖爐があり、その傍に三、四人の兵隊がゐた。大きな机が三脚並べてあつた。注意書や軍人精神といった様なものが所々に貼つてあつた。部屋は二つに區切られ、寢臺は美しく整頓されてゐた。板壁のところ、棚になつてゐて、一番上の棚には軍服や袴、袴下などが整頓されてゐた。中の棚には手箱があつた。一番下には綺麗に磨かれた靴だとか水筒、劔といった様なものが掛けてあつた。何れも一人の人が整頓したやうに綺麗に並べられてゐた。

私は命ぜられた寢臺の前に行つた。寢臺には「森伊佐雄」と楷書で書いた札が掛けてあつた。整頓棚の手箱にも「森伊佐雄」と書いたのが貼られてある。寢臺の上には軍服が揃へて置いてあつた。班長の命令で、應召兵の一同はその軍服に着換へようとした。家から着て來た洋服は脱いで、軍隊の襦袢、袴下をつけた。純白のよく洗つてある襦袢、袴下は何んともいへない心地がした。

私の寢臺の隣で何か仕事をしてゐた一等兵殿が、私の無器用を見兼ねてか、私に手傳つてくれた。一等兵殿は、馴れた手を器用に動かして、丁度、母親が子供

に着物を着せる様に順序よく着せてくれた。私はいはれるまゝに動いた。最後に軍衣（上衣）を着せられた。

「これで私も立派な軍人になつたのだ」

私はさう思つた。一等兵殿は人形でも見つめる様に私を見てゐたが、

「少しゆるいやうだが、そのうちに肥つてくるから丁度よくなるだらう」

といつて笑つた。體格のよい一等兵であつた。さつきまで和服をつけてゐた應召兵の全部が、軍服に着換へさせられたのだ。いづれも立派な兵隊さんになつた。襟の一つ星もなかく似合ふ。

二、三日前まで印半纏を着てゐた私が、地方では見られないやうな立派な羅紗の服を着たのだ、馬子にも衣裳といふが、自分ながら自分の軍服姿に惚れぐした。

軍服を着た私達は醫務室で體格検査を行つた。勿論、悪いところのあらう筈がない。第二補充兵だといつても、別に身體に故障があつての事ではない。幾分、丈が低く、體重が不足してゐただけだ。かうして軍服を身につけると甲種合格の

人と大差ないではないかとさへ思つた。

夜の點呼の時、班長殿が班附下士官や古參兵の人達を紹介してくれた。

「こちらの髭を生やした人は、お前らの教育班長だ。陸軍伍長鈴木金治殿だ。忘れるな」

「この男は陸軍兵長高橋泰雄殿だ。判つたな」

といつた様な調子で紹介してくれた。軍隊といふところは頗る喧しいところだと思つてゐた私達は、第一日ですつから安心してしまつた。それに私は、入隊一日にして若き班長殿にある親しみと尊敬を持てるやうな氣がした。

馴れない寢臺にもぐり込んだ時、眠れさうもないと思つたのに、晝間の疲れとあまり緊張してゐた故か、すぐに深い眠りに落ちてしまつた。

入隊式

忠誠を誓ふ

入隊式が行はれたのは、私達が初めて軍服を着せられてから二、三日たつてからであつた。軍隊生活中で一番嚴肅な時は何時だつたかと質されれば、それは入隊式の時だつたと答へる位で、その莊嚴な入隊式の様は、或は地方の人には想像出来ないかも知れない。

入隊式は、一國民として軍隊に入つたからは、大元帥陛下の赤子として飽くまで忠誠を盡すことを誓ひ奉る神聖なる式である。改めて忠誠を誓ふまでもなく、一億國民皆兵であり、銃をとると鉞をとるとにかゝはらず、吾等一億國民は

陛下の赤子であるが、軍隊は又特別である。

私達は班長殿から「明日は入隊式がある」といはれても、それがそんな嚴肅なものとは思はなかつた。丁度中學校の入學式のように簡単に思はれた。中學校に入學すると第一目に講堂に堂まつて校長先生から、學校の歴史や、校風や、これからのこと等聞かされるものだ。その時はたゞ中學生になつた嬉しさで、たいして感激もしないものだ。

だから私達は入隊式といふものも、入學式の様なものだと考へてゐた。

うすら寒い、雲の深い日であつた。雪でも降りはないかと懸念されるやうな日の朝、私達、應召兵は正装を命ぜられた。また帶劍の仕方も知らない私達であつたが、戦友の人達の手を借りてすつかり一人前の軍装をした。かうして軍装になると、また自ら身が引き締るものだ。軍装といつても單に軍服に帶劍しただけであつた。

部隊の兵士は全部正装して營庭に出た。各中隊毎に整列した。堂々として立派

なものだ。私は涙の出るほど感激した。武勳を語る数々の勳章を胸に下げてゐる古參兵もゐた。

部隊本部の玄關口には、菊の御紋章を染め抜いた幕が張られてあつた。その中には畏れ多くも 御眞影が奉安されてゐた。幕は實に美しかった。

私達は初めて部隊長殿の聲を聞いた。太い力のこもつた、そして凜とした號令であつた。入隊式は始つた。

御勅諭の捧讀があつた。

御勅諭に對し奉り、捧げ銃が行はれた。

唸唸たる喇叭の音、着け劔をした銃が林の如く立つてゐる。日本刀が燦然と光つてゐる。

〇〇名の大勢が集つてゐると誰が信じよう。咳一つするものがない。すべては嚴肅そのものであつた。神聖の氣はいやが上にも漂ふ。

部隊長殿の捧讀してゐる聲が凜然と響く。

朕は汝等軍人の大元帥なるぞ。

おゝ、何たる感激ぞ。その刹那、私の感激は絶頂に達し、私の血潮は奔流の如くたぎるのであつた。私は初めて生き甲斐を感じた。醜の御楯となつて千萬人と雖も吾征かんの氣油然として湧き起るのだつた。〇〇名の兵隊一人残らずが同じ感激に胸を震はしてゐるのだ。日本人にして、日本軍にして、初めてうける感激である。兵隊の陸は引き締り、眼は燦として輝き、米英撃ちてしまむの決意は嚴然として眉宇に燃えてゐる。

この決意、この氣概が日ならずして戰場に發揮されるのだ。

正面の幕が外された。

御眞影奉拜式が行はれるのだ。

時局を御軫念あそばされ、伊勢の皇大神宮に御親拜あそばされた吾が 大元帥 陛下の御眞影である。

各中隊毎に、御眞影の御前に進み、御拜申し上げる光榮に浴するのだ。

中隊長殿の號令に、兵共は緊張した足並で營庭の砂利を堅く踏みしめて、行くのだ。部隊長殿が、御眞影の傍に直立不動の姿勢で立つてゐられる。恰も石像の如く動かない。御眞影の御前まで進んだ私達は、中隊長殿の凜然たる「最敬禮」の號令に、私の鼓動は再び大きな波を打ち始めた。熱い涙が一滴、二滴、營庭の砂利をぬらした。もう何物も考へる餘裕とてない。

「大君の御爲死なう」

たゞ、それだけである。

奉拜を終へた私達は、すぐ横の雄詰神社の前に掲げられてある軍旗に對し、同じやうに最敬禮をした。

部隊の傳統と幾多の勳功を物語る軍旗、この軍旗の下に従つて、幾度か正義の駒を進めたのだ。

肅然たる感動の中に始まつた入隊式は、肅然たる感動の炎の中に終つた。

班に歸つた私は、高鳴る鼓動がいつまでも鎮まらうとしなかつた。この感激を

地方の人に聞かれても、私はどう語つてよいか、その形容の仕方が分らない。如何なる文字をもつてしても表現することは出来ない。軍人のみが享くる感激であり、感動であるのだ。

私は過去に於て、軍隊の話をよく聞いた。軍書も讀んだ。しかし誰も入隊式の感激を語つてはくれなかつた。

それは人に話すにはあまりにも嚴肅であつたからである。私とても恐らく永久に語り得ないであらう。班内に歸つて暫し茫然としてゐた私は、氣をとり直して唇この感激の光景を日記の二頁に記した。この二頁こそ、私の生涯にとつての得難い二頁となるのであらう。

私はかつて米國の一記者の書いた「米國兵はなぜ弱いか」と云ふ一文を某雑誌で讀んだことがある。與太者が職にあぶれて、仕方なく兵隊になるといふ一節を思ひ出した。現在の米兵の脆弱性や殘虐性を結びつけて考へる時、その當然であることを悟つたのであつた。

畏れ多いことながら、私は御勅諭に示されてゐる國軍の傳統と無敵皇軍を考へて見た。日本皇軍の強い所以は自ら明瞭となつてくるのである。

御勅諭は軍人に賜りたるものではあるが、獨り軍人のみが奉體すべきものではない。一億國民が齊しく奉體すべきものである。私達の處世に於て、あらゆる處世訓も、ものの數ではない。

かの有名な戰陣訓も、つまるところは、御勅諭の謹解であるに過ぎない。私達は、教育勅語の御精神と軍人に賜りたる御勅諭とを以つて永遠不變の御聖憲と仰がなくてはならない。

夕食の膳には、私達の入隊を祝ふ心盡しの赤飯と頭附の魚があつた。

軍隊の一日

軍隊の一日は起床喇叭に始つて消燈喇叭に終るのである。

起床の時間は季節によつて違ふが、一度び起床喇叭が鳴り響けば、如何なる事情があると雖も、病人以外は全部起きなければならない。それは絶対的のものである。私達新兵は起床喇叭の鳴る前に眼を覺して、寢臺の中でモン／＼してゐる。萬一にも起床喇叭に眼が覺めないと困ると思ふ心配からである。しかし、かうしたことは絶対いけないと班長殿から再三注意をされた。古參兵などは喇叭が鳴り終るまで熟睡してゐて、喇叭の終るのを待つて、丁度機械仕掛けの人形が起き上るやうに起きるものである。

私達が入隊した當時は、寒風、身を切るやうな日が続いてゐた。地方にゐる時など、寒さのため中々、起きようともしなかつた私も、軍隊に入つてからといふものは、一朝として喇叭に起されるやうなことはなかつた。心が緊張してゐたのかも知れない。必ず起床前、何分か前に眼が覺めてゐた。

今朝も亦、いつもと變らない啾唳たる喇叭が響く。私は既に數分前に眼がさめてゐた。

喇叭と同時に不寝番の兵が大聲で「起床ッ」と連呼して中隊全體を起してくれ
た。

直ちに乾布摩擦が始まる。起床したらすぐ上衣を着ることなく、上半身は裸で
乾布摩擦をするのである。

「よいさ、えいさ」

どの兵もくみんな寢臺の前で、掛聲もろとも乾布摩擦を始めるのだ。力強い掛
聲の合唱だ。いかに極寒の朝でも、乾布摩擦だけは休むことがない。それは恰も
軍隊の激刺さを表象してゐるかの如く、心の奥までがくしくしく浄められてゆ
くのだ。

隆々たる筋肉が紅くなる。隣りの班でも、いや隣の中隊でも、部隊が異口同音
に「よいさ、えいさ」の掛聲で始めるのだ。

この元氣激刺たる行事は五分ぐらゐで終る。心身共に爽快となり、一日の日課
は始められるのだ。

舎内の清潔整頓が始まる。一人々々、各々決められた受持ち區域の清掃が始め
られるのだ。寢臺を直す者、班内を拭くもの、屋外を掃く者、何れも整然と、し
かも敏捷に行はれる。何れもマスクは必ず使用しなければならない。

明け放たれた窓からは朝の冷氣が班内に流れ込んで来る。

日朝點呼は朝の軍人の挨拶であり。その日のスタートである。日朝點呼は原則
として舎外で行はれる。營庭に兵隊がヅラリと並ぶ。各班毎に整列する。班長殿
が人員の點呼をして、異状の有無を週番士官に報告する。

何時だったか、新兵が入隊した翌日のことであつた。班の人員がどうしても一
人多い。幾度調べても一人多いのである。きつと新兵の誰かが班を間違へて一人
入り込んでゐるに違ひない、とは思つたものの扱て誰がまぎれこんだのか、さつ
ぱり見當がつかない。昨日入つたばかりの新兵達の顔は皆同じやうで、どれが誰
だか判らない。すると隣の班長殿がやつて来て、一人の新兵をつれて行つた。
同じやうな兵舎と、同じやうな兵隊だ。新兵が自分の班を間違へたのも笑へぬこ

とである。

人員點呼がすむと全員宮城の方向に向つて、謹んで御勅諭の奉唱が始まるのだ。

一、軍人は忠節を盡すを本分とすへし

一、軍人は禮儀を正くすへし

一、軍人は武勇を尙ふへし

一、軍人は信儀を重んずへし

一、軍人は質素を旨とすへし

一同聲を揃へて奉唱が終れば、宮城遙拜である。みたまわれの感激が湧く。今日一日を 陛下の赤子として忠實に軍務に服することの出来るやうに念じた。

雄詰神社は營門の右側にあつた。緑の松が神社の周圍に植つてゐる。部隊將兵の戦死者を祀つてある神社である。本部隊の守護神として部隊長以下常に敬禮するのである。

御勅諭の奉唱が終ると、次は雄詰神社に祀られる先輩上官の英靈の冥福を祈る

のが例である。故郷の方を向いて、父や母に挨拶をするのもこの時である。

點呼がすんで、朝の食事までは朝稽古である。如何に寒風肌を刺すとも朝稽古だけは特別の事情なき限り施行する。銃劍術や各個教練に朝の汗を流すのである。かくする時は腹の工合も程良く空いてくる。朝食がうまく食べられるのである。

朝食といへば、朝稽古の終る時分になると炊事場の飯上げの汽笛が高らかに鳴る。飯上げとは、中隊毎に當番があつて、その隊の飯を炊事場までとりに行くことである。各班の食事當番が周番上等兵に引卒されて炊事場に行く。炊事場では中隊毎に、飯や汁を渡すのである。

元來、軍隊は粗食であるといふけれども、今日の軍隊はなか／＼粗食ではない。といつて勿論贅澤をしてゐるといふのではない。たゞ徒らに副食物ばかり多くても、それが榮養價値から見る時、甚だ勘定の合はぬものがある。いくら澤山のお菜でも榮養價が少かつたり偏つてゐたりしては何んの役にも立たぬ。

軍隊に入ると必ず肥るといふ。それは、軍隊の食事が平均した榮養を有つこと

にもよるのである。

班に歸つた當番は、更にこれを班員の食器に分配するのである。平均に盛るのはなか／＼難しいのである。先の方が多く盛られ、終りの方へ行つて足らなくなつたとする。馴れるまでは食事の配分も中々樂ではない。だが平均に盛られた食器が班の机の上にズラリと並んだところは、また美事なものである。

食事の用意が出来る時、當番は班の先任者に

「食事の員數〇〇名異状なく揃ひました。食べて頂きます」

と報告する。この時分に食事喇叭が鳴るのである。班員が全部揃つて机に向ふ。食事が始まるのだ。一口の飯は必ず三十回以上齧嚼することになつてゐる。

食事は質素が第一であるが、炊事場の戦友が作つてくれた料理はまた格別で、他所には見られぬ味がある。

新兵のうちは、なか／＼三十回も齧嚼するなどといふことは出来ないことだ。

新兵はまだ馴れてゐないので、なんとなくその日の日課に追はれがちなのであ

る。食事が終れば、

「頂きました」

と言つてすぐ班内の清潔にかゝらなければならぬ。ぐづくしてゐると午前の演習に出る時間になつてしまふ。心ばかりあせるのも新兵の特徴だ。だからこの時間に煙草も喫めることにはなつてゐるが、どうして、煙草など喫んでゐるやうな餘裕は藥にしたくともないのである。

喇叭に起きて喇叭に寝る軍隊は、規帳面て四角張つてゐると思ふかも知れないが、その規律正しいのが日本軍隊の特徴である。また慣れてくると寧ろこの規律正しいことが軍隊生活を面白く愉快にするものである。

午前の教練は各季節によつて時間は一定しない。

教練は、原則として練兵場で行はれるが、時としては體操場が使用される。如何なる時でも教練は峻烈であり嚴格である。教練は戦争に勝つための教練である。息つく暇も與へない。教官以下、戰場に在るの氣持ちで眞劍に教へる。教はる新

兵もまた真剣である。

駆足！。匍匐！。發進！。停止！。

廣い練兵場を縦横に駆けまはる。

教官も、班長も、兵も一身同體である。戦争に勝つための教練である。お國のための教練である。一時間毎位に休憩がある。四五人づつ一團となつて談笑する煙草の味をしみく味はへるのもこの時だ。教練の後の煙草は特別うまい。

午前の演習が終ると、隊へ歸つて晝食をする。午後はまた教練が續けられる。戰場には休日がない。教練にも休日はない。雨の日、風の日、如何なる日でも休まない。

練兵場に夕闇が迫る頃まで教練は續けられる。もう民家から風呂の煙が上り、遊び疲れた子供らが家へ歸る頃私達の一日の教練は終るのだ。程よく疲れた足を行進喇叭に引かれて歸ることもあるが、大概は、駆足かまたは軍歌演習である。大聲に軍歌を歌ひながら歩くと、一寸ぐらゐの疲れなど忘れてしまふものだ。

夕食前に入浴がある。入浴はその日の疲れを忘れさせる。中隊毎に時間がきまつてゐる。勝手な時間に入る譯にはいかない。入浴には「入浴軍紀」といふものがある。

廣い浴場は兵隊で一つばいである。

入浴は鉢巻入浴で、浴槽内では手拭は絶対に使へない。これは汚れを防ぐのと幾分でも病氣を防ぐためであらう。だから如何なる兵でも浴槽内では鉢巻である。廣い浴槽が鉢巻で埋づめられてゐる。奇妙な光景だ。芋を洗ふやうだ。戦友同士で背中を流し合ふ美しい風景も見られる。

一日の汗と疲れを流して夕食になる。

夕食には班長殿が會食する。朝食や晝食に引きかへ夕食は實にのんびりとしてゐる。一日の教練から、初めて自分の身體に歸つたやうな氣がする。愉快的談笑も起る。

夕食後は兵器の手入れである。兵器は軍人の魂である。兵器について幾多の美

談が残つてゐるやうに、兵器を尊重する兵の心は普通人が物資を尊重する心とはまた變つてゐる。

兵器は 天皇陛下からお預りしてゐるものである。

酒保から饅頭などの配給になるのもこの時間である。二十時になると日夕點呼がある。日夕點呼は班内で行はれる。

宮城遙拜、雄詰神社拜禮、故郷への挨拶、會報、命令傳達等がある。週番士官が點呼を施行するのである。

日夕點呼の時には必ず 御勅諭の奉唱がある。全文を奉唱するのである。御勅諭は軍人の精神である。今日一日、御勅諭に對し背き奉らなかつたかと、反省するのである。

點呼が終つてから、消燈まで自分の用事が出来る。勉強をしたり、故郷へ手紙を書いたり、日記をつけたり、被服の修理をしたりするのもこの時間である。

用のない兵は、すぐ寢臺にもぐり込む。温い毛布にくるまつて夢路を追ふので

ある。

まもなく消燈喇叭が鳴る。もう起きてゐる兵はない。みんな寢臺の中で白河夜船である。晝の疲れのためか、ぐつすと深い眠に落ちる。不寢番の低い足音のみが時々聞える。めまぐるしい軍隊生活の一日が終つたのだ。

教官

兵器拜受

教官とは文字通り先生のことである。新兵を一人前の兵隊に仕上げるには、この教官の努力は涙ぐましいものがある。國民學校の一年生を教へる先生は、する分世話が焼けるものだ。然し軍隊の一年生なる新兵の教育は世話は焼けるが、並大抵の教練では物の役に立たない。軍隊は家庭であると共に戦場である。だから毎日の教練も必死でなければならぬ。

私達は軍隊といふところは辛いところだと思つた。事實入隊當時は辛いこともあつた。しかしそれは實際に辛いのではない。我々が平素、ふしだらな生活をし

てゐたのが、急に嚴格なる生活に一變したための辛さであつた。だから入隊當時、辛いと思つたことも、慣れるに従ひ、日一日と軍隊のよさ、軍隊の愉快さ、が身にしみて来る。最も峻烈な教練が最も愉快になつて来るものだ。

教官は先生であると同時にまた父でもある。私達の教官殿は見習士官であつた。部隊の中でも一、二の優秀な方ださうだ。小柄ではあるが、どことなくきかぬ氣の眼元が鋭く、唇が引締つてゐて、聖人を思はせる様な風采であつたが、嚴格の中にも飄逸のところがあつた。後で分つたことだが教官殿は和尚さんだつた。私の班は擲彈筒班であつた。

入隊當時の日課は、各個教練が主であつた。小銃班、輕機班と交々各個教練をする日が續いた。不動の姿勢、敬禮の練習等から始まつて駈足が日課の大部分であつた。

不動の姿勢は軍人基本の姿勢である。故に軍人精神は内に充溢し外嚴肅端正ならざるべからず。

とあるやうに、軍人の行動は不動の姿勢に發してゐるのである。

軍隊の不動の姿勢はなか／＼難しかった。形ばかり立派でも内に精神が正しくなくつては、本當の不動の姿勢ではないと教官殿は教へられた。

番號もよく練習した。番號などたゞ稱へればよいぐらゐに思つてゐたが、これがまた大變であつた。

番號は明瞭でなくてはいけない。番號を明瞭にすることは、やがて言語の明瞭といふことに重きをおく軍隊に於ては當然のことである。

敬禮もさうである。簡単に手を舉げればそれが敬禮だと思つてゐたが、矢張り教つて見ると敬禮にも色々あるものだ。同じ舉手の禮にしても相手方によつて各違ふものだ。たとへ同列同級であつても一日の長あるものには敬禮をしなくてはならぬと、御勅諭に示されてゐる。

初めのうちはつい今までの習慣が出て、帽子をとつてお辭儀をしたり、無帽のくせに舉手の禮をしたり、無帽で舍外に飛び出したりすることがある。

教練がすゝむに従ひ、そんなこともなくなる。教練も愈々本格的になつて來た。私達の教練は、部隊から七、八百米離れた廣い練兵場で行はれた。その往復は、大抵早駈か駈足であつた。初めのうちは、この駈足がなか／＼大變であつた。胸が押しつぶされるのではないかとさへ思はれたが、四、五日するとすつかり足も馴れて來て、むしろ、駈足がないと物寂しいやうになつて來た。教練といふものは有難いものである。駈足をしなくともよささうなところを駈足する。これは決して兵共を苦しめんがための駈足ではない。戰場へ出た時の備へのためである。教官殿はこんなことにまで注意をしてゐるのだ。

待ちに待つた歩兵銃が渡されたのは、それから間もないことだつた。兵隊になつたら當然銃を持てると思つたが、なか／＼さう簡単に銃は持たせてくれない。その筈である。銃は長くも 天皇陛下から賜る軍人の魂である。

一人／＼中隊長殿の前に進み出て、謹んで拜受するのである。この銃も自分と死生を同じうするものであると思へば、異常な愛着が湧くものだ。隊長殿から拜

受する時の兵の手は一樣に震へてゐた。感激の涙が頬を傳はる。誠に嚴肅なる一瞬ではある。

この式の舉行されたのは、風はないがとても温度の下つた寒い一日であつた。中隊の兵舎の後に新兵は全部整列した。寂として聲がない。

銃を拜受した私達新兵は、急に元氣づいた。

「これで愈々本ものの兵隊になつたぞ」といつたやうな氣分になつたのである。

教官殿も班長殿も、教練の時は別人のやうになる。平常は御二人とも誠に慈愛の深い上官であつて、私達は最も尊敬してゐたのである。私達はこの教官、この班長と共になら、喜んで死地に飛込む決心であつた。

まだ大學を出たばかりの教官殿は、どこか學生氣質が抜けきらなかつた。教練の合間、僅かの休憩時間の時、必ず草原の上に私達を車座に坐らせ、面白い話など聞かせてくれるのが常であつた。僧侶の出身だけあつて禪味のある修養話が得

意だつたが、それでも、腕白話が多かつた。

教官殿はまた煙草が非常に好きだつた。

「煙草を忘れて来た者には、教官がやるぞ」

等と私達のところへ「ホマレ」をぼんと投げてよこすこともあつた。教官殿はまた情熱家でもあつた。「中村震太郎の歌」が非常に好きらしく、聞かせてくれることがあつた。そんな時にはきつと涙ぐんでゐた。

班長殿もまた情熱家で勤勉家であつた。

「何事も人より餘計苦勞しなければ、立派な兵隊にはなれない」とよく私達にいはれてゐた。

雪中の教練

或る日、雪の非常に深い日だつた。

吹く風も冷たく、恰も生き物が躍るやうに颯々と吹いてゐた。練兵場はたゞ銀白のむしろを引き延べたやうに一色に覆はれてゐた。

北邊の風雲漸く急を告げんとしてゐる。この雪中の教練こそ絶好である。私達は教官殿に引率されて練兵場へ出て手榴弾の投擲をやつてゐた。雪の手榴弾投は樂ではなかつた。大きなぼたん雪は、私達の眼や口に飛び込み、時々視線をさへぎつた。立投げ、膝投げ、寝投げ、幾度もく、繰返し繰返し練習をした。

「冷たくとも我慢するんだ。北滿の兵を見よ、零下何度にも、お前等と同じやうな訓練をやつてゐるんだ」

私達をばげまして下さる教官殿の眼には、心なしかキラリと輝いたものが見えた。情熱家である教官殿は恐らく、この雪の中に兵に教練さすことを躊躇してゐたのであらう。しかし實戰のことを思へば、こんな雪ぐらゐる何んでもない。「兵共よ、辛からうが辛棒してくれ」といひたげに見えた。

私達はどう返事してよいか分らなかつた。冷たいのは私達だけではない。教官

殿も班長殿も冷たいのだ。教官殿の姿も眞白で、軍刀ばかりが鋭く光つてゐた。

「こんな雪にへこたれてはならない……」

愚痴を云ふどころか、私達の士氣はいやが上にも旺盛になるのだつた

手榴弾投げをやめた私達は、教官殿の命令で、こんどは雪中駆足を始めた。

「駆足——進め！」

の教官殿の號令が嚴として雪の中に飛んだ。私達は一齊に走り出した。教官殿は先登に立つて走つた。練兵場はなかく廣い。遙かに雪の中に陸軍病院の屋根が繪に描いた様に浮んでゐる。雪は相變らず止まない。頬にぶつかつた雪は、肌のぬくもりで解けて流れる。眞白に積つた雪の上には、私達の軍靴の跡が定規で線を引いた様に四列に長々と印されてゐた。

教官殿は相變らず先登だ。「教官に負けてはならぬ」と心で自分を激勵しながら走りつゞける。だが呼吸はだん／＼荒くなつて來た。胸が苦しくなつて來た。頬がほてつて來て體中が火の玉を抱いたやうに熱くなつて來た。それでも教官殿

は黙々先登を走つてゐる。

練兵場の真中程に杉の木で囲まれた八幡神社があつた。私達はそこに入つた。森の中は別世界のやうに、風もなければ雪も降つてゐなかつた。老杉が枝を交へてゐるので、雪が降ちて来ないのだらう。うす暗い中にお社が建つてゐた。

駆足はそこで止まつた。私達は先づ銃の雪を拂つた。手拭を出して銃を拭いた。それからお互ひの身の雪を拂ひ落しつこをした。老杉の根本に四列に又銃をしたら、ホツとして妙に明るい心地がして来た。

「どうだ、寒さはすつかり飛んで行つたらう」

教官殿は私達の顔を見ながら笑つていはれた。

私達はだまつてゐた。森の外の雪は大分激しくなつて来たらしい。社の屋根の上が大分白くなつて来た。時々杉の枝からバサツと境内に落ちて来た。うす暗い中を真白な蝶々が飛び交ふやうに一片、二片と舞ひ込んで来た。

「いゝか、教官がわざ／＼この雪の中でお前達に教練をやらせるのは、何もお前

達を困らせよう、苦しめようと思つてではない。お前等は教官が血も涙もない人間に見えるかも知れない。しかし教官もお前等と同じ人の子だ、寒いことも辛いこともお前等と同じだ。しかし寒いからといつて教練を休んでゐたらどうなるか。辛いだらうといつて教練に手加減を加へたらどうなるか。そんなことはお前らがよく知つてゐる筈だ。辛いことも、みんな皇國のためだ。雪の中の駆足位では辛い中に入らぬのだ。極寒のアリーシャンの先輩を見る。悪戦苦闘、遠く故國を離れ、北洋の離れ小島に濃霧と闘ひながら祖國の第一線防備に盡してゐるのだ。幾多の勇士はこの地に英靈となつて眠つてゐるのだ。この先輩のことを考へたら、今日の雪中教練など物の數ではない。實戦の時はこんなものではない。敵が眼の前にゐるのだ。雪が降らうが槍が降らうが、その敵を倒さなくてはならないのだ。その敵を倒すこと以外何ものもないのだ。鬼畜の如き米英を倒すのだ。雪や氷に負けてはならぬぞ！ よいか分つたか」

情熱家である教官殿の聲は愈々熱して来た。私達は誰一人寒さうな風をするも

のはなかつた。

「はい」

と聲を揃へて力強く答へた。

「鬼畜のやうな米兵は、病院船を襲撃した。傷病兵を戦車で轢き殺した。この米兵の殘虐振りを聞いて教官は涙を流して憤慨した。この仇を討つのはお前等だ。お前等こそ幾多の英靈の仇を討つのだ。今、米英を撃滅しなくては再び奴等を討つ時がない。お前等は大本日本帝國の軍人だ。畏多くも 天皇陛下の赤子だ。よくノ、肝に銘じておけ。今日の寒中教練も、お前等が聽て戰場へ出て米英を撃滅する時の準備教練だ、分つたな……」

聲涙ともに下るとは、このことであらう。教官殿は手を堅く握つてゐる。私達の憤怒の血潮は沸きたぎつた。

「さうだ、第一線ばかりではない。國民全體、一人々々が決戦態勢なのだ。仇敵米英撃ちてしまむ」と私達は誓つた。

雪は可成りひどく降つて來た。流石の森の下も餘程白くなつて來た。風も出たらしい。時々舞ひ狂ふ雪の輪が又銃の上に舞ひ落ちた。

雪の中を一人の老婆がやつて來た。藁で作つた靴を履き、羅紗の角巻を頭からすつぽりかぶつてゐた。

「御苦勞様で御座います」

と老婆は丁寧な兵隊達に挨拶をして社殿の方へ歩いて行つた。かなり遠方から來たらしい。丁度、今、教官殿が火の如き熱辯が終つたところだ。兵達は限りない憤怒と米英撃つべしの堅い誓ひにやゝ興奮してゐた後のこととて、この老婆の出現にやゝ精神の緊張から解放されたやうであつた。社殿に額づく老婆の姿は神聖そのもののやうに見えた。老婆はもう相當の年であらう、髪は眞白で顔には深い皺の波が寄つてゐた。

孫の武運長久を祈りに來たのであらうか、或ひはまた倅のか……老婆の打ちふ

る鈴の音が静かな森の中にガラン／＼と響く。力のない拍手が聞える。老婆はしばし瞑目してゐた。誠に神聖なるものであつた。

無言のまゝ立ち上つた老婆は再び角巻をすつぽりかぶつて歩き出した。私達の前を通る時、こんどは黙つてお辭儀をして行つた。

風はだいぶ強くなつて來た。雪は容赦なく老婆に吹きつけた。しかし老婆は屈することなく黙々と元來た道を引き返して行つた。軍國日本ならではの見られぬ美しい風景である。

軍隊の折々

朝のひと時

「月月火水木金金」といふ言葉は海軍の專賣特許ではない。軍隊全部の通用語である。いや軍隊ばかりではない。一億國民の通用語である。戦争は愈々重大段階に突入したと教官殿が説明された。義勇公に奉ずるは今だ。土曜も日曜もあつてはならない。皇國の隆替は此一戦に在りと東條首相はいはれた。吾等生を皇國に享くる者誰か皇國に殉ずるの道を知らないものがあらうか。「葉隠」に「武士道とは死ぬことなり」とあるといふが、吾々軍人の本分は 天皇陛下の御馬前に死ぬことだ。されば、兵の誰もがきまつて、戦地に征くことの一日も早かれと念じ

てゐるのである。

よし、第二補充兵であつても、國を出るときは赤檮であつた。家の敷居をまたぐとき、既に戦場へ向ふ決心だつた。軍隊に入つてからは戦地の話を聞く度に、胸が躍るのだつた。早く戦地に征きたいといふ熱望は私一人ではない。友人のたれかれが、既に南方戦線に、或は北の護りに就いてゐるとき、私ばかりが内地にゐるといふことが、何んだか氣重に感ぜられてならなかつた。

まだ軍隊へ入つたのは昨日今日である。本當の軍隊の味などの分らう筈がない。それなのに一かどの兵隊になつたつもりで、心ばかりは戦地へと飛ぶのであつた。

戦友の中にノモンハンの激戦に参加した勇士がゐた。夕食後の一ときはきまつて、ノモンハンの實戦談である。この戦友は實に話の上手な兵であつた。多少誇張されてゐるかも知れなかつたが、流石に弾丸の洗禮をうけて來た勇士の話は力がこもつてゐた。熱があつた。私達新兵は手に汗を握つて聞いてゐた。

子供のころよく冒険小説を讀んだ。今、戦友から聞くノモンハンの實戦談はそ

の冒険小説以上にスリルに富んでゐた。この戦友が勤務の都合で班にゐないときなど、實戦談が聞かれないので物寂しくさへ思はれた。

また時折、現地の本隊から手紙が來た。その都度私達の血は躍るのだつた。

補充兵が入隊して間もなく、「入隊後の希望」を書かされたことがあつた。その時は全部の補充兵が、第一線に立つて米英の畜生共を叩たき斬るのだ、と書いてあつたと班長殿がいはれた。

戦地の勞苦がもたらされることがあつた。食糧輸送の道が斷たれたのか、既に今日で一週間、草の根、川の魚が主食物であると書いてあつたり、もう喰ふ川の魚もない。椰子の實が唯一の飲料水など書いてあつたこともある。我々が判断の出來ない勞苦があるものだ。だが、どんな困苦があらうと、矢張り戦地へ征きたい。今日この頃では戦地へ行く日が待ち遠いのである。

いつたい何時になつたら戦地へ征けるのだらうかなど教官殿に度々聞いた。

「お前達がいくら戦地へ征きたくたつて、御命令がなければ行くことは出來ない。

御命令があれば征きたくなくても征かなければならない。第一線の兵隊ばかりで争は出来ない。内地の兵隊がしつかりしてをればこそ、安心して思ふ存分の活躍は戦が出来たのだ。御命令があるまでは日々の教練に勵み、體力を練つておくことが大切だ。第一線だけが戦場ではない。兵營は既に戦場だ、練兵場は戦場だ。そのつもりで一所懸命にやれ」

とよくいはれた。當然のことだと思つたが、矢張り戦地への憧憬はやまなかつた。兵營も戦場だといはれるが、毛布に包まれて安眠出来る戦場があるだらうか、三度々々の食事の頂ける戦場があるだらうか、きまつた様に入浴の出来る自分達、これで第一線の先輩に對してすむであらうか——私は時々こんなことも考へるのであつた。

教官殿や班長殿に諭されるまでもない。日一日と軍隊の内部が分つてくるに従ひ、私達の心は戦場に在る心でいつぱいだつた。だから教練は一日々々と火華を散らす様に激しくなつた。

早く一人前の兵隊になりたいと私達は願つた。

木村といふ戦友があつた。彼の寢臺は私と並んでゐた。彼は班中で一番の大食家だつた。木村はお人好しのくせに、いやに威張りたがる癖のある男であつた。

木村と私とは比較的仲のよい戦友であつた。それが、物のはすみで口論をしたことがあつた。

或る朝、起床後の掃除の時であつた。朝の掃除は私達新兵にとつては、恰も戦場の様であつた。めい／＼が戦場に出た氣持ちになつて、人一倍と立ち働くのであつた。

木村は雑巾を持つて床を拭いてゐた。私は自分の用が済んだので、

「木村、俺がかはつてやるから雑巾を貸せ」

と言葉をかけた。ところが木村は、

「駄目だ！」

と妙に尖んがらがつた口調でぶつつけるやうにいふのであつた。私はムツとし

だが、それでも穩かに、

「少しは休めよ、俺が代つてやるから」

といったが、どうしたものか、木村は餘計なことをするなといはんばかりの態度だつた。折角の私の親切を無にしてゐると思ふと腹立たしかつた。

「お前ばかり使ふ雑巾ぢやあるまい」

賣り言葉に買ひ言葉、私は遂に應戰的に出た。

「さうだからといつてお前ばかり使ふ雑巾でもあるまい」

木村の口調はますます尖つて來た。これは木村が意地悪にしてゐるのではない。初年兵らしい感情で、人に負けてはならない、人より一倍餘計に働かうとする氣持ちが手傳つてゐるのだ。なにも雑巾に限つたことはないが、一度手にしたものは離したくなかつたのであらう。私はその心は判つてゐた。また私が故意に木村をどうしようといふのでもなければ、木村にしても、私に悪意を持つてゐないといふことは百も承知であるが、もののはすみといふものは止めることが出來ない

のかも知れない。

「何も悪いことをいつた譯ぢやあなし、そんなに尖らなくつたつて、いぢぢやないか」

私は理窟で負けた形で、仕方なく彼の態度をなじてやつた。

「そんなに欲しいものなら、くれてやらあ」

と木村は突然立ち上つて、水の切れてゐないビシヨ／＼の雑巾を床にたゞきつけた。

綺麗に磨かれた歩兵銃の掛けられてある銃架の傍の出來事であつた。冷たい水しぶきが飛んで銃架にかゝつた。

私も木村もハツとした。第一、兵器である歩兵銃のかゝつてゐる銃架を濡らしたのである。二人とも茫然とした。他の戦友達は、二人の間にこんな事件が起つたとは知らず、懸命に働いてゐた。私達二人は何もいはず睨み合つたまゝ立つてゐた。

「森と木村来い！」

突然、後から聲がしたので、二人は　ツとして、漸く我にかへつた。美田といふ幹部候補生であつた。さつきから二人の間の所作を見てゐたらしかつた。

二人は恐る／＼美田候補生の前に進んだ。候補生は今直したばかりの机の上に乗と紙を持ち出して何か書かうとしてゐるらしかつた。煖爐にはまだ火が入つてゐなかつた。

「何をしてゐたか」

私と木村は何んと答へてよいかわからなかつたので、

「ハイ」

と答へただけであつた。

「ハイでは分らぬ。何をしてゐたかを聞いてゐるのだ、いへないのか」

私は木村の顔を穴のあくほど見てゐた。木村も私の顔を見てゐた。二人とも返事のしようがなかつた。私は、何も應戰的に出なくてもよかつたと考へた。後悔

は先きに立たずで、私は飛んだ結果になつてしまつたと思つた。それは叱られるのが恐ろしいのではない、後味が悪いのであつた。

入隊後の決意として、人に負けないでやらうといふ強い氣持ちを抱いてゐた。無意識といふ譯でもないが、時折ふとしたはずみで地方氣分が出るのであつた。それがいけないのだつた。

木村には何等敵意がある譯でもなし、いはば、木村の掃除を手傳つてやらうとした私の厚意が、逆効果を來したのだつた。

戦地へ征けば死生を同じうする戦友ぢやないか――、私は木村に濟まないやうな氣がした。

無言のまゝ相對してゐた私は、戦友達にも木村にも濟まないといふ氣分になるとともに、心のわだかまりもだん／＼解けて行つた。

木村も最初の劍幕はどこへやら、私と同じ氣持ちになつて來たらしい。二人の間に微笑さへ起つた。

美田候補生は二人の態度をじつと見てゐたが、

「判つたな。死生を共にする戦友同士だ、こんな小さいことで喧嘩などしてどうなる。さ、分つたら、それでよい」

といつて候補生も笑つた。無言の教訓である。上に立つ人は矢張り偉いなアとつくづく思つた。私と木村とはこのこと以來特に親しくなつた。

美田候補生

軍隊内では常に清潔と整頓と員数はやかましくいつてゐる。整頓は不時の用意に備へて平常から用意しておくためでもあるが、規律を尊ぶ軍隊としては、亂れたる整頓は軍隊内の亂れ、即ち不統一を來すことになるので最も禁じられてゐる。だから兵達は定められた場所に、必ず定められた品物を備へておかなければならない。バケツの如きでも、定位置に定數だけは必ず備へておかななくてはならない。

どんな眞暗な眞夜中でも、一たび不時呼集の喇叭が鳴れば、兵隊は一勢に起き出でて、眞暗闇の中に速かに軍装をして營庭に集合するのである。この場合、暗くて、どこに軍刀があるのか分らぬなどといふことは絶対にない様、平常から心掛けておくのである。第一整頓棚には何、第二整頓棚には何々と云ふ様に、その置く場所と置く品物は、常に一定されてゐるのである。

員數検査も時々ある。支給された品物は何れも官給品である。中には消耗品もあるが、又 陛下の品物をお預りしてゐるものもある。縫針一本と雖も不足してゐてはならない。若し破損などしたる場合は速に修理するなり或は補充を申請しなくてはならない。

私物も特殊の事情、特別の許可がなくては、これを持つことは出来ない。寒いからといつて毛のシャツを着ることも原則として出来ない。若し各自に自由を認めたらば、それは、直ちに軍隊の統率をみだすことになるのであるから、些細のことではあるが許されないのである。

一日の教練が終つて日夕點呼がある前に、明日の出動の準備のために、先づ兵器の手入れを行ふ。銃はよく拭き淨められ、軍靴は必ず磨かなくてはならない。

いつだったか、私達補充兵の中に軍靴の磨いてないものがあつた。靴箱の中に埃にまみれた軍靴のあるのを發見した美田候補生は、早速私達補充兵を班内に整列させた。かゝるとき、昔ならば有無をいはず、鐵拳が横ッ面に飛んださうであるが、今は絶対にそんなことはない。といつてその儘濟むことでもなかつた。

「軍隊内では私的制裁は禁じられてゐる。俺はお前等に鐵拳を喰はさうとはしない。しかしお前等は何故、きめられてゐることを實行しないのだ。靴を磨くのにどれだけ時間がいるか。班長殿や古參兵が口を酸つぱくして注意したり、叱つたりするのは何もお前等が憎いからではない。一度でも同じ釜の飯を喰ひ、一晩でも同じ班内に宿を共にしたら兄弟も同然だ。一刻も早く立派な兵隊に仕上げたいから、小言をいふのだ。靴を磨かなかつたといふことは、お前達はたいしたことではない様に思ふかも知れないが、たとへどんな小さなことでも、定められてあ

ることは必ず實行しなくてはならない。ましてや、兵器の手入れをし、軍靴を磨くことは明日の活動の準備である。こんなことが分らぬ様でどうして一人前の兵隊になれると思ふか」

候補生は手を舉げなかつたが、怒心頭に發したらしく右手は堅く拳を握つてゐた。恐らく鐵拳を飛ばしたかつたであらう。顔は寧ろ青ざめてゐた。心なしか時震へてゐるのが見えた。若し私的制裁が許されるならば、私達の頭上には鐵拳の雨が降つたことであらう。

私達は濟まないと思つた。思ふ存分殴られてみたかつた。それがせめても私達の不始末に對する制裁でもあつたのだ。然し美田候補生は震へる右手をじつとこらへてゐた。

「お前達は上級者を信頼して日々の行動を行へばそれでよいのだ。上級者の命ずるところは黙々としてその命に服して行動すればよいのだ。たとへば甲の上等兵が或る仕事をやれといはれたらハイと答へてその仕事に精出せばよいのだ。そこ

へ乙の上等兵が来る、それを止めよといったらハイといつて黙つてそれを中止すればよい。また甲の上等兵が来て、何故止めたかといつたら、ハイと答へてその仕事を續けてやればよいのだ。これは一例でこんなことはある筈がないが、物の例として話をするのだ。上官はお前達に理の通らぬことを強ひることはない。然しお前達から見ると無理だと思ふこともあるかも知れない。然しお前達はそれに對して批判をしたり理窟をいつたりすることはならない。軍隊に批判や理窟をいふことは禁物だ。絶対服従の精神こそ必要なのだ。上官の命令はその事の如何を問はず直ちにこれに服従し、と仰せられてゐるのだ。戰場へ出て、大敵を向うに廻し、必ず勝つ一つの要素は即ち上官の命令に絶対服従することだ。分つたか。

この單純な言葉が、この分り切つてゐる言葉が、私達の心にしみくと染込んでゆく様な氣がした。私達の頭腦の亂雜は、この候補生の言葉によつて整然とされて行くやうに思はれた。

少しでも、私達を立派な兵隊にしてやらうと努力してゐる班長殿や古參兵の人

達に濟まない氣持ちで一つばいだつた。諄々と諭されてゐた私達補充兵の眼には涙がたまつてゐた。その涙で美田候補生の顔がぼやけてハッキリ見ることが出来なかつた。

私達是一所懸命で軍務に服してゐるのだ。しかし、傍から見るとどこかに緊張の足りないところが見られるものだ。候補生だけではない、班長殿や古參兵の日常の注意があつてこそ、初めて一人前の軍人になることが出来るのだ。

私達は候補生の言葉がよく分つた。候補生の注意が尊い訓示のやうにも思はれ、これから必ず命ぜられた仕事は、その日の中にやつてしまはなければならぬと思つた。

娛 樂 會

「食事が終つたら第三内務班に集れ、娛樂會をやる」

日曜の夕食時間である。週番下士殿が大聲で呶鳴った。

娯樂會、それは忙しいそして厳格な軍隊生活を潤はす唯一の慰安會である。兵隊の一人々々が自ら隠し藝を披露するのである。早くいへば素人演藝會である。浪花節を唸る髯の古參兵があるかと思へば、謹嚴そのものの様な兵長殿が安來節を踊り出す等、まさに捧腹絶倒ものである。この夜一夜だけは兵達にとつて正に天國、日頃の教練の疲れを休め、明日の教練への精進力を養ふのである。

今宵も週番下士殿が娯樂會があることを知らせて來た。私達は急いで夕食を済ませて、第三内務班に集つた。内務班は綺麗に片付けられてゐた。もう各班から大部分先着してゐた。

開會の辭を述べる者もないが、誰いふとなく既に開會されてゐるのである。時週番下士殿が、

「こんどは第五内務班の加藤の番だ」

などと命令してゐる。命令をうけた加藤なる兵は、恐らく故郷には二、三人の子

供でもあるだらうと思はれる三十歳位の應召兵だつた。

「自分は何んにも藝はないのであります」

と加藤は困つてゐるらしかつた。

「何も出来ないことはない。軍人がひと度、上官の命令を受けたとき、どうするか知つてゐる筈だ。何んでもよいからやれ」

週番下士殿はヘンなところへ「上官の命令」を出したものだ。第五内務班の兵達が一齊に、

「おい、加藤やらんか、何をぐづくしてゐる。班の名譽のため頑張つてくれ」

妙なところへ名譽が飛び出して來た。集つてゐる他班の者がドツと噴出した。

加藤は仕方なく立ち上つた。

「自分は何んにも出来ないのですが、週番下士殿のいはれた様に、上官の命令に背くことは出来ません。家にゐる時は子供相手にナヅ／＼をしたことがあります。皆さんにそのナヅ／＼を出して私の責任を果したいと思ひます……熱海

の狸が化けました。何んに化けたでせうか？」

「熱海つて温泉場のことか？」

突然、髯の兵長殿が叫んだ。

「さうです」

兵達の考へはなかく決らなかつた。答へが、出さうもない。

「分つたぞ、熱海の狸はお客を化かした」

誰か答へた。ドツと爆笑が起つた。

「アタミの夕、抜きはアミです。網に化けたのです、終り」

またしても一同爆笑した。なんだ、た抜きかといつた様な聲をして兵隊はそれこそ狸ならぬ、狐につまゝれた形であつた。

忙中閑ありで、明日にも戰場へ立たうとする兵達が一刻を笑ひに過ぎす、それは無邪氣そのもの以外に何物もない。この無邪氣な兵達がひと度戰場に立てば、鬼神も哭かす勇猛果敢の勇士となるのだ。

軍隊には感傷もなければ批判もいらぬ。たゞ大君の御爲死すればそれでよいのだ。

私も時々引張り出された。森は歌がうまいから、との評判らしかつた。

或る娛樂會の時だつた。眼光の鋭い髯面上等兵殿が壇上へ出られた。上等兵殿の容貌があまりに眞面目なので何をやるのかと思つた。恐らく軍歌を歌ふか詩吟でもやるのではないかと思つた。ところが一同の思つたことは全く見當違ひであつた。上等兵殿は壇上に上るや否や、開口一番、

「私しや十六 満洲娘

春よ 三月……

と、どら聲で始めたものだ。兵達は腹を抱へて笑ひ出した。それでも上等兵殿は夢中である。他の兵が笑はうがどうしようがお構ひなし、自分の責任を果す、即ち責任の強い上等兵殿はこんなにも自分の責任といふことを考へてゐるらしい。一同が大聲で笑へば笑ふ程、上等兵殿の顔はひん曲つて來た。上等兵殿は必死だ。

歌ふ聲を聞くより、表情を見てゐた方が多分に面白かつた。

完全に責任を果して降壇する上等兵殿に私達は手の痛くなるまで強い／＼拍手を送つた。

いつもの娯樂會の花形である一等兵殿が立ち上つた。この一等兵殿、どうしたことか、實科の方はあまり香しい成績ではなかつたが、娯樂會の時はいつも「殊勳甲」である。彼れはいつも、「俺の特有の技能を見てくれ」等といつてゐた。

その一等兵殿が立ち上るや續いて飛び出した兵があつた。それはこの間〇〇方面から歸還したばかりの上等兵殿だつた。

「南方土産を頼みますよ」

などと彌次が飛んだ。上等兵殿は一等兵殿と小聲で何か打合せを始めた。兵達は俄然色めいて來た。この一等兵殿にあの上等兵殿、誠によい取り合せである。何か素晴らしい演藝が見られると思つたからだ。

聽て一等兵殿は勿體振つてか咳拂ひをした。サア何か始まるぞと一同固唾を吞

んだ。

「俺の美聲に和して上等兵殿の珍舞踊があるさうだ。うまく行つたら御慰み、まづ行つても御慰み」

一等兵殿は少し氣取つてゐるらしかつた。いつもの蠻カラに似合はず、猫なで聲で口上などをいつた。一同は思はず強い拍手を送つた。

「最初は出雲土産、安來節」

どこから持ち出して來たのか小さな桶を持ち出した上等兵殿は、腰にぶら下げた手拭をとつて頬かむりをした。その恰好の珍、踊らない先から捧腹絶倒ものだつた。

一等兵のいやに商賣じみた安來節につれて、中々器用に踊り出した。

「よう田舎太夫！」

誰かゞ半疊を入れた。一同また大聲で笑つた。安來節は次から次へと歌詞が變つた。その都度上等兵殿はおどけた風をして一層踊りに馬力をかけてゐた。

地方にゐたとき、相當この道では素人藝達者であつたのだらう。

「おい、早く南方土産を見せてくれ」

他の班の上等兵殿が大聲で注文した。

「こんどは一つさんざ時雨と洒落ませうか」

安來節が一段落すると、上等兵殿はさう一等兵殿に向つていつた。ウンと頷いた一等兵殿は、

「さんざ時雨か かやのの雨か……」

と顔を歪めて歌ひ出した。上等兵殿が變な腰つきで踊りだした。先ま程の安來節の瓢逸に引きかへ、これはきた變つてゐる。全然踊りにはなつてゐない。自己流の出鱈目である。足を上げたり、手を曲げたり、變に甘えた様な表情をして見たり、何んのことはない、ラジオ體操のお化けの様な踊りである。

一同はあきれた様に思つたが、眞面目に歌ひ眞面目に踊つてゐる御兩人を見ると眞向から笑ふ譯にも行かず、笑ひを噛み殺してゐるのだつた。

こんな馬鹿げた様な演藝會も、男ばかりの殺風景の軍隊にあつては中々面白い風景である。兵隊達は晝間の教練の疲れも忘れて、童心に返り愉快に一夜を過すのであつた。班長殿も兵長殿も、娛樂會の夜だけは無禮講である。こんな些細なことが軍隊では一つの修養となり、一つの活力素となるのである。教練の合間の僅かの休憩時間を利用して、髯面の兵隊達が鬼ごつこに興する様は寧ろ奥床しいものでもあつた。

また或る娛樂會のとき、南方の歸還勇士が尺八で「追分」をやつたことがあつた。

椰子の葉蔭で大きな丸い月を眺めながら、よく尺八を吹いたといふこの風流兵は、時々南方戦線をしので、一人藤棚の下に尺八を吹くことがあつた。

明日をも知れぬ運命の兵隊が、たゞ 天皇陛下の御爲死を覺悟してゐる兵隊が、大悟して一管の音色に故郷を偲ぶ、その床しい心根を私達は寧ろ涙して想像したのである。

酷熱の赤道直下、血と汗で大東亞建設の礎石を築いて來た勇士達は、自分の手柄話などおくびにも語らない。

「ブキテマ山頂からシンガポールの街を眺めた時、過ぎし日の激戦で戦死した戦友の姿が思ひ出され、この胸が張り裂けるやうでした」と前置きしてから「遺骨を抱いて」といふ歌をうたふ勇士があつた。

亡き戦友の靈を偲んでか、この勇士の眼には感激の涙が光つてゐた。顔は陽灼けして赤銅色をしてゐる偉丈夫である。聲は悪く、歌ひ方も甚だ下手だ。それでゐて私達に一種異様の強い、何物かを押しつけて來る。私達は笑の後の一刻をしんみりと涙してその歌を味はつた。歌ふ兵は恰も高僧の如く氣高くも見られた。

國井初年兵

凡そ仲のよい友人を數多くもつてゐる人はあるかも知なれいが、軍隊に入つて

兵隊同士が親しくなることはまた格別である。どこの誰だか、恐らくは一見したこともない人達が、俺だ貴様だといふ仲になるのである。

一本の煙草も分けて喫みといふ歌の様に、友情即ち戦友愛は軍隊のもつ特徴である。これあるがために日本の軍隊は強いのだ。

同じ釜の飯を喰ひ、同じ兵舎に起居し、同一の目的のために訓練してゐる軍隊に於ては、この強い戦友愛は寧ろ當然かも知れない。

私達が應召されて入隊してから、だいぶたつて初年兵が入隊して來た。この初年兵達は私達補充兵と違ひ立派な甲種合格の兵ばかりであつた。私達、補充兵のやうに身長足りないのや、目方の不足してゐる様な兵隊ではなく、入隊したその日からどこから見ても立派な國家の干城であつた。私達はいつも、「流石に甲種合格は立派だな」といつたくらゐるのである。

私は幾分、氣持に於て兄さんらしくなつたのである。まだ碌に軍隊のことなど知りもしない私達ではあるが、それでも古參兵がゐない場所では、自ら初年兵に

對して見さんらしく振舞ふのであつた。

初年兵は私達より早く寢に就かせるのが例であつた。私達は、軍隊の生活に少しは馴れて来た故か、幾分圖々しくなつたのかも知れない。消燈喇叭が營庭の一角から班内に流れこむ頃は、初年兵はもう白河夜舟である。私達は消燈喇叭の鳴るまで、ぎり／＼一つばい自分の用事やら明日の演習の準備などで忙しいのである。

ところが、この初年兵が入つて来てから、一つの事件が持ち上つた。事件といふと大袈装であるが、實は私達が就寢する時分になると、物凄く強ひて形容すれば雷公怒るかの如き響きが班内をゆるがすのであつた。あたりがあまりにも静かなので、この響きはまた特別に聞えるのであつた。或る時は高く或る時は低く、歌でも唄つてゐる様な響きである。初年兵のうち誰か／＼かく鼾である。

この鼾があまりにも五月蠅くてなかく／＼眠れないのであつた。

上等兵殿がやさしく「誰だか見ろ」といふので私は起きて、電燈をつけて見た。

初年兵の一人が、晝の疲れのためかグツスリと寢込んで、知らぬ間の鼾である。私は起きさうかと思つたが、あまりにも邪心のないその寢顔を見るとどうしても揺り起すことは出来なかつた。

「起しませうか」

私はそつと上等兵殿に訊ねて見た。

「故意にやつてゐる譯でもあるまい。起したところで仕方のないことだ、まあそのまゝにしておけ」

兵長殿が寢臺の中から聲をかけたので、私は再び電燈を消して寢臺に入つた。この騒ぎに他の初年兵は殆んど目を覺ましたらしいが肝腎の御本人は相變らず大鼾である。電燈が消えて再び眞暗になると却つて大きく響くのであつた。私達は暫くはその鼾に惱まされた。忌々しい様な腹立ちさへ覺えさせられたのであるが、御當人があんなにも氣持ちよく眠つてゐるのだと思ふと、無暗に腹を立てることも出来なかつた。

軒に惱まされた私達も、明け方になつてウト／＼と夢路に入つたと思つたら間もなく起床喇叭が鳴り響くのであつた。軒の御本人はもう起き出でて上半身裸體となつて乾布摩擦の用意をしてゐた。逞しき筋肉、盛り上る様な肩の肉、色淺黒く、どこから見ても立派な帝國軍人である。この偉丈夫が昨夜の軒の犯人だと誰が信じよう。

「お前の軒には、みんな一晩中閉口させられたぞ」

私は朝食の時その兵に向つてさういつた。兵はきまり悪るさうに下を向いて唇をかんでゐた。私は非常に氣の毒になつた。

「でもそんなことに氣を腐らせなくてもいゝんだ。心配せずに軍務を頑張るのだ」

私はさういつて彼を慰めてやつた。彼はたゞ頷くだけであつた。この初年兵の姓は國井といつて、私と同じ年であつた。

國井は實に立派な兵であつた。軒には惱まされるが、學科といひ、實科といひ、

なか／＼よく出来る兵だつた。班内に於ては、影日向なく働いてゐた。丁度、軒の償ひでもするかやうに、みんなの分まで働かうとしてゐた。彼は至つて無口の方で、殆んど必要以外のことはしやべらなかつた。たゞ黙々として働くことが彼の信條であつた。彼の生國は新潟縣の山奥だとかいつた。そのせるか、他の兵達には面會人が多かつたが、國井にだけは面會人は一人も來なかつた。私は彼を寂しからせてはならないと思つたので、時折、私が外出でもすることがあると、その歸路源氏豆などを買つて來て與へることがあつた。そんな時でも、言葉少なに感謝の意を表すだけであつた。無愛想で、お世辭などいへる程世馴れはしてゐなかつた。それでゐて彼は班内の誰彼になく愛されゐたのである。

さうかと思ふと、私の軍靴を知らぬ間に磨いてくれたりして私を恐縮させることも數度であつた。

「俺のはいゝから古參兵殿の靴を磨いてやれよ。俺の靴を磨いたりしてゐるところを見られると叱られるぞ」

私はそんなにもいつたりしたが、國井は私が一番好きらしかった。私も國井が好きだった。教練の暇の時など、芝生の上に寝ころがつてゐる私の傍に、國井はだまつて坐つてゐることもあつた。

初年兵が〇〇に派遣される日がやつて來た。明日は愈々出發だといふに班内は何等變つたこともなく静かであつた。初年兵の誰もが、皆澄み切つた心であるのだ。ひと度お召しにあづかつて入隊した以上、最早、自分の身體は自分のものでなく、上御一人のものである。大君の御馬前に死する覺悟は既に出來てゐるのである。軍隊生活は戦場の生活である。營内は戦場である。日課の教練といひ、或は清掃の如きことまでが、總て戦場の教練であり、戦場の清掃であるのだ。だから今、〇〇の壯途に上るとなつても、たいして心の變化はあるものではない。既に今日あるを豫期してゐたのであつた。寧ろその日の來たのが遅い位であつた。

でも愈々明日ともなれば軍衣袴も軍靴もすべて第一装用の眞新しいものが配布される。身につくもの總べてが新品である。昔、武夫が戦場にいで立つ時、装束

に香を焚いた時の氣持ちと同じである。

實戦場はなんといつても班内とは違ふ。物も不十分だらうし、また暇もないことだらう。さうした心組からも眞新しいものが配布されるのである。

「向うへ行つたら、特に身體に氣をつけて、しつかり頑張るんだぞ」

私は國井の肩をたゝいて勵ました。國井は靜かに頷いて、「ありがたう御座います」と簡單にいふのであつたが、國井の眉宇には堅い／＼決意が燃えてゐた。米英撃ちてしまむ。國井は恐らく誰よりも働き、誰よりも優れた殊勳を樹てることだらう。私は國井の態度が頼母しくさへ思はれた。

出發を前にして最後の就寢である。國井は相變らず大甍を立ててゐた。

愈々出發の朝だ。残りの兵は全部營門外に整列して壯途を送るのだった。

軍装に凜々しく固められた初年兵は、今ぞなつかしの營門をいで立つのだ。兩頬を紅潮させた初年兵は、恰も中學生が終學旅行にでも行く様に元氣一つば、であ

つた。毎日聞き馴れた喇叭ではあるが、今日の喇叭はまた格別勇ましくもあつた。

ザク……ザク……ザク……

綺麗に掃き清められた營庭の砂利を、力強く踏みしめて征く兵等の元氣……。

萬歳の聲は天地をゆるがすのである。

男兒ひと度御召しにあづかり、今ぞ、征途に向ふ。生きて再び還ることのなきこの營門！、今ぞ吾等の東北健兒はいで立つのだ。

感激と興奮は今や絶頂に達した。萬歳の爆發に正に意氣天を衝くの概があつた。

國井の姿が見えた。軍装に戦闘帽の國井、脊負ひ袋を斜に脊負ひ、銃を肩にした國井の凜たる姿、あゝ、私は思はず「國井！」と叫んでしまった。國井も私を見た。四つの視線が力強くも結ばれた。國井はかすかに微笑を浮べた。

ザク……ザク……ザク……

軍靴の響は萬歳の聲に消されさうである。私達より後から入隊した初年兵は、私より先きに米英撃滅に向ふのだ。彼等の勇みに勇んで出發するのに反し、私は何

か口惜しいやうな、物足らなさを感じたのであつた。

「國井、しつかりやつてくれ。俺も後から征くぞ」

私は心の中でさう叫んだ。

戦友は今ぞ祖國を後に數千キロの彼方なる戰場に、い向ふのだ。

この初年兵が部隊にゐた日は誠に短かつた。彼等と十分話し合ふ暇さへもなかつた位である。娛樂會の時、初年兵の誰かが、お國訛りの民謡で私達を喜ばせたこともあつた。あまりにも短い日であつたため、一人々々の名前さへはつきり覚えてゐなかつた。それでも私達にとつては血肉を分けた兄弟にも等しいのだ。否、或る點では兄弟以上の親しみがあるのだ。生死を共にする戦友なのだ。

初年兵が立つた後の班内はまた元の静けさに返つた。もう國井はゐない。私達は國井の軀に惱まされることはなかつた。しかしその一面、なんだか非常に寂しいやうな氣がしてならなかつた。その晩、消燈後、私は靜かに國井の姿を想ひ浮べ、彼の武運長久を祈つた。

戦友

入隊してから一ヶ月位すると、戦友たちの氣性がほゞ判つて來た。

みんな善良な氣性のものばかりだつた。中鉢、伊藤、北野、桑村……年こそまぢく／＼ではあるが、みんな信用がおけて、お互ひに生死を共にするには十分信じ合へると思はれる者ばかりだつた。この信じ合つた戦友ならば、命令一下、決死隊となつて敵陣に突入することも易々と出来ると思つた。

後藤といふ戦友がゐた。容貌のことを云々するのはどうかと思ふが、その後藤の顔は一風變つてゐた。顔が變つてゐるなんてことはない筈なのに、後藤の顔だけはどうも眞正面から見ることは出来なかつた。

後藤が教官殿や班長殿に叱られるのは、きまつてこの顔、即ち表情によつてであつた。氣を付けの號令がかゝつても、後藤は笑つてゐる。

「後藤ッ、不動の姿勢に笑ふ奴があるか」

などと叱られるのであつた。當の後藤は至極眞面目であつた。彼が緊張すればする程、彼の表情は笑つた様に見えるのである。だから入隊當時は、教官殿や班長殿に叱られたのである。が日が経つに従つて、これが後藤の表情であると知られるに及んで、教官殿も班長も、叱つたことが妙に氣の毒になつたと語られたこともあつた。

或る日曜日のことだつた。班の都合で應召兵は外出しなかつた。誰が誘ふともなく、戦友達は誘ひ合つた様に、一緒に體操場の隅にある藤棚の下に集まつた。體操場には梁木もあれば、鐵棒もあつた。營庭と營外の境には三米もある堤で垣が周されてあつて、その内側には櫻や松の大樹が枝を交へてゐた。藤棚の下は軽い芝生であつた。

柔らかな陽ざしを浴びて私達はその芝生の上に寝ころがつた。

時々、垣根の外を電車が轟々と音を立てて走つてゐた。

「誰か煙草を持つてをらぬか」

坐るや否や齊藤がいふのであつた。

「煙草？ 馬鹿なことをいふな。營庭で煙草を喫つてみる、それこそ營倉ものだぞ！」

木村が答へたので、齊藤は氣まづい顔をした。實際、軍隊では煙草を喫ふことをやかましくいつてゐる。火災豫防のためと規律を重んずるためである。煙草は喫つてもよろしいが、必ず、吸殻入れのあるところで吸へとなつてゐるのである。吸殻入れのある場所は常に一定されてゐる、だから、たとへ火災の心配のない様な廣々とした營庭であつても、さうふしだらに煙草を吸ふことは出来ないのである。木村が答へるまでもなく、齊藤もそれを知つてゐたのではあるが、つい、煙草好きの齊藤が口癖となつてゐたのであつた。

「軍隊といふところは妙なところだな」

伊藤が突然そんなことをいひ出した。伊藤は私達應召兵のうちでは一番年が上であつた。彼は芝生の上に仰向けになつて青空を眺めてゐた。

「何故だ？」

と、北野が問ひ返した。

「さうぢやないか。昨日までまるつきり知らなかつたお前等と、今日はかうして芝生の上に寝ころがつてこんなに親しく話をするなんて、實に妙ぢやあないか」

「何を今更そんなことをいふか、そりや當り前のことぢやないか。軍隊は一つの家族だ。お前も俺も同じ家族の一員ぢやあないか。その家族のめい／＼が仲が悪くてみる、戰場へ征つたつて、碌に戦争も出来んぢやあないか」

桑村がたまりかねて一言お説教めいていふのであつた。桑野は故郷では私設青年學校の教師なんかをやつてゐたといふ、私達仲間のうちでは一番のインテリであつた。

「おかた（細君のこと）のある奴ア誰れだ」

こんどは北野が質問した。北野は入隊前は鐵道に奉職してゐて、列車の車掌を

やつてゐたことであつた。

私達の中で、妻帯者は、伊藤と栗原だけであつた。栗原は愈々應召と決つたとき、かねて婚約中であつた今の細君と正式に式を擧げて入隊したのであつた。だから、結婚生活といふにはあまりに短い日時であつたのだ。一人息子である栗原は、ひと度お召しがあつた以上、生還もとより期せずの意氣で自分の亡き後の老父母の面倒を見てくれる者を急いで選定したのである。私達は彼の用意周到さに一驚したのである。栗原は時々こんなことをいふのであつた。

「俺の結婚日記は僅か八日で終つてゐるんだ。それでも俺の妻はきつと俺の子供を生んでくれるだらう。俺はこれから戦地へ行くのだが、既に俺の跡取りは出來てゐる筈だ。俺は安心して死んでゆける」

妻もなく、もちろん子供のある筈のない私は、栗原のさうした氣持ちがうらやましかつた。

北野の質問があまり突拍子もなかつたので、一同は鳩が豆鐵砲でも喰つたやう

に驚いたが、當の妻帯者たる伊藤と栗原は、顔を赤くしてゐた。

「伊藤の奴、結婚して一年にもなるのに子供がないなんて實に不都合ぢやないか。栗原を見る、僅か八日でも子供が出來たといふぢやあないか」

「おい、俺に子供が出來たといつ斷言したか俺は子供が出來たと思ふといつただけぢやあないか」

「おい、さう怒るなよ」

一同は大聲で笑つた。營外を通る電車がけだるい様な警笛を鳴らして通つた。軍隊には大學出も小學出もない。たゞあるものは兄弟以上の戦友愛のみだ。

理 髮

「誰か俺の頭を刈つてくれないか」

或る日曜の午後、洗濯を終つて私達は、班内のストロウの傍に腰をおろして煙

草を吸つてゐた。私は、私の髪が少し延びてゐるのに気がついたので、誰にいふとなくさういつた。

「俺がやつてやるよ」

後藤が愛想よくいつた。私は早速、下士室へ行つて理髪道具を借りて来た。軍隊には床屋はない、戦友同士がお互ひに刈るのである。

私と後藤は理髪道具を持つて玄關のところへ出た。班の理髪はすべてこの三和士の上でやるのである。まだ洗濯したばかりの眞白い布を首に巻いて、椅子に坐つた。

後藤は私の後に廻つて、バリカンの調子を見てゐた。

「大丈夫かな？」

私は後藤に尋ねた。

「少しぐらゐ痛くとも我慢するさ」

後藤は人事の様に、頼りない返辭をした。刈り始めると矢張り後藤の手際が下

手であるのか、バリカンが切れないのか、髪を刈るのではなく毛りとするのである。

「痛いッ」

私は思はず悲鳴をあげた。

「少し位は我慢しろといつたぢやないか」

と、またがり／＼始めた。白布へ落ちた髪の毛を見ると、根に白いものがついてゐた。私はそれを見てぞつとした。

「おい、肉がついてゐるぢやないか」

私がたまりかねてさういふと、

「それぢやあ止めるか？」

と平氣でいふのである。今止められてなるものか。

「馬鹿をいふな」

仕方なくさういつて、なほも刈つて貰ふことにした。

伊藤が階段を下りて来て、散髪してゐる私に聲をかけた。

「面會に行つてくるから頼むよ」

「よし子さんか？」

痛さのため、歪めた顔で私は尋ねた。

「どうだかな」

「土産をたのむよ」

「うん」

伊藤は忙しげに駆けて行つた。きつと最愛の細君が訪ねて來たのであらう。私は伊藤の姿を見送りながら、黙つて齒を喰ひしばつた。

「痛くないか？」

後藤は私が黙つてゐるので、私の顔を覗きながら私にきくのであつた。

「痛くて物がいへないよ」

「我慢しろ、たゞより安いものはないからな。もうすぐ終るから」

こんな冗談の中に、私はふとなにかしら温い血の繋りを感じたのである。戦友

なればこそこんな無作法な口がきかれ、またそれを氣にも止めぬのだ。バリカンの動きが止つたと思つたら、こんどはブラシで、いやといふ程きつく頭をたたくのである。私は思はず、頸をすくめた。

「鏡を見ろ」

私は後藤の差出した手鏡を見ると、虎刈りながらも一通りはどうやら刈取られてゐた。

「どうもありがたう」

それでも私は禮をいふのを忘れなかつた。親しき中にも禮儀ありだ。たとへ虎刈であらうとも、筆りとられる様に痛くとも、散髪してくれた厚意には感謝しなくてはならない。

私は剃刀りと石鹼を持つて洗面所へ下りた。コンクリートで造られた洗面所には軍衣を脱いで襦袢一枚になつた兵隊たちが、洗濯に餘念がなかつた。コンクリートの上には石鹼の泡がいつぱい散らかつてゐた。北野も桑村も一所懸命に洗濯

をしてゐる。日曜日はまた兵隊の洗濯日でもあるのだ。

私は水道の水を洗面器に汲み、片隅にかゞんで髭を剃り始めた。人一倍毛深い私は、二、三日剃らないと顔中が眞黒になるのである。私はいつも、「髭剃だけが皆より餘計の仕事だ」などと冗談をいふこともあつた。

研ぎたての剃刀は心地のよい音をたて、私の顔を綺麗にして行つた。

散髪をし、髭を剃つた後の冷水の洗面はまた何んといふ心地よいものだらう。

北風が相當強く吹いてゐる。可成り寒い日であるにも拘らず、その水の氣持ちよさ、身も心も同時に綺麗に洗はれて行くやうに感じられた。私は軍服姿の私を鏡の中に見出した時、獨りで微笑んだ。

「男つ振りがよくなつたぞ」

洗濯の手を休めた北野が冷やかした。

私は洗面器の水を両手で掬ひ上げ、顔にぶつつける様にして幾度ともなく洗つた。

私の軍隊日記

私は今まで、私の氣の向いたまゝを記してゐた。恐らく讀者の皆様は御迷惑の點もあつたと思ふ。この邊で私の軍隊生活の断面を御しらせることが、應召兵の軍隊生活、ひいては軍隊の内面を知る上に近道かと思ふので當時の私の日記を引つ張り出して、そのうちから數日ぶんを選ぶことにした。

一月廿日 今朝は馬鹿に寒い。兵舎の屋根の上は霜で眞白である。朝の點呼の時、指先がしびれて仕方がなかつた。両手をお互ひの掌で摩擦をして僅かに寒さを凌いだ。こんな冷たさは近來まれだ。恐らく入隊してから今朝が一番冷たいことだらう。でもこの頃はすっかり軍隊生活にも馴れて來た故か、寒さにも屁古垂れるやうなことはなくなつた。

私は元來が第二補充兵である位だから、身體が弱かつた。弱いといふより、寧ろ貧弱だつた。こんな身體で果して御役に立つことが出来るだらうかとさへ思はれた。軍隊といふところは人一倍勞働の激しいところだ、甲種合格の者でさへ樂ではないと聞いてゐたので、嚴格な軍隊生活に耐へられるかどうか内心非常に心配してゐた。實を云ふと、應召される嬉しさとこの心配とで心は半ばであつた。心は勇んで入隊したものゝ、それを考へると私の心はグラついたのであつた。然し入隊してからは、私のさうした考へは總て思ひ過しであつたことが分つた。論より証據、私はかうして毎日軍務に服してゐるのだ。これは一に上官の御指導の宜しき爲だ。班長殿も古參兵の人達も何れもよい人達だ。矢張り軍人になれてよかつた。私は日本男子としての義務を果すことが出来るのだ。

班長殿は應召兵一同に次の様に言つた。

「軍隊に入つて一番禁物は心配事だ。心に心配事があつては肝心の教練も上の空だ。それでは 天皇陛下に對して申譯がない。心に何一つの心配もなく懸命に教練を勵むことがとりも直さず 大君に忠なる所以である。お前等の身體はお前等のものであつてお前らのものではない。お前等の身體は 上御一人のものだ。お前等は死ぬと命ぜられ、ば喜んで死んで行くことの出来る身體だ。それが私事で心配等しては申譯がない。さりとてお前等としても色々と家庭の事情もあるであらう。一概に心配をするなど言つてもさう簡單に行かない者もあらう。さう云ふ時には獨りで心配せずこの班長まで遠慮なく言ふてくるがよい。班長は悪いやうにはせぬ。お前達は、この班長を親とも思ひ、又兄とも思つて、總てお前等の考へに餘つたことがあつたら相談に來い」

さう云つて下さる班長殿の御慈愛の言葉がしみぐと胸にこたへて有難くて涙がこぼれる位だ。

軍隊に於ては、内務班は一家族である。班長は即ち家長である云ふ。

今日も教練から歸つて來ると古參兵の人達が、「寒かつたらう、こゝへ來てあた

れ」と煖爐の傍から聲をかけてくれた。古參兵の人達は私達の爲めに石炭をさへくべてくれるのだつた。

私達は「ハイ」と言つたものゝ嬉しきで胸が一ぱいであつた。私達は軍装を解いてから煖爐の傍へ行つた。上等兵殿は立ち上つて、私達に椅子をすゝめてくれた。そして『ホマン』の箱を出して私達に喫ふように言つた。私達は上官の暖き心に感謝の念で一ぱいだつた。この暖き心に甘へてはいけぬ。上官はあくまでも上官でなくてはいけない、と私は私の心に鞭うつた。「遠慮なんぞしなくてもよい」と言ひながら私達に一本づゝ取つてくれた。僅か一本の煙草と言ふ勿れ、その思ひやり、上は下を慈むその心根、美しきその心情に私達は泣かされるのだ。日本の軍隊の美しさは世界のどこでも想像出來ないことであらうと、しみじみ感じた。

「どうだ、軍隊は面白いか」

「ハイ」

私達は元氣よく答へた。

「だん／＼よくなる法華の太鼓だ……」

こんな冗談まで言つて私達を笑はした。軍隊生活ほど無邪氣な生活はない。地方の人が聞いたつて、或は本當にしないかも知れない。嚴格である中にも、こんな和やかさがあるのだ。私は軍隊に入つて始めて眞の人生を知つた。人生を知ると同時に、私には希望が湧いて來た。生甲斐が生れて來たのである。今や帝國の陸海軍は廣袤數千キロの戦線に亘つて、暴敵米英に膺懲の鐵槌を下しつゝあるのだ。今日の教練は、明日の戦場での激戦の下稽古だ、一生懸命にお國のために盡さう。私達は何にも考へなくてよいのだ。たゞ、天皇陛下の御馬前に喜んで死んでゆけばよいのだ。

一月廿八日 私は今とんだことをした。夜の點呼後であつた。私は何氣なく「中鉢さん」と戦友の名を呼んだ、ところがそれがいけなかつたのだ。班にゐた

班長殿が私の聲を聞いて、

「今言つたのは誰だ」

とけはしい顔つきで訊ねた。

「ハイ森であります」

私は班長殿の前に進んだ。私の周りの兵達はどうなることかと成行きを注視してゐた。水を打つた様に静かである。

「お前は班長が日頃から教育してゐることが分らぬのか」

班長殿は大分怒つてゐるらしかった。私は班長殿の顔を真正面に見ることが出来なかつた。たゞ無言のまゝうなだれてゐた。

「班長がお前達を教育してから何日になると思ふか」

「はい、二週間であります」

「その間班長が、あれほど言葉に氣をつけろと言つたことが分らなかつたか」

「自分は間違つてゐました」

私はキツパリと答へて自分の不明を詫びた。然し班長殿は意外に怒つてゐる様子であつた。自分では、班長殿の言ふ言葉は常に頭の中に置いて注意してゐるつもりではあるが、つい地方にゐる癖が出るのである。それは何も私ばかりではなかつた。ほかの應召兵も同じであつた。班長殿は常に教へた。同上の者でも、位のあるものには、その位相當の敬語を使はなくてはならない。たとへば、師團長には閣下を用ひ、部隊長には殿を用ひよ、古兵はさんをつけて呼ぶのもよいが同僚はさんをつけてはいけない。同僚は名前を呼び放しでよいと……私はそれを忘れてはゐなかつた。だが、まだ軍隊に馴れてゐない証據に、ふと地方の言葉が出てさんをつけなくてもよい同僚にさんをつけてしまつたのだ。こんなことは些細のことだが、矢張り決めたことは、實行しなくてはならないのが軍隊である。班長殿はしばらく黙つてゐたが、

「今後は氣をつけろ」

何を思つたか班長殿はさう言つて出て行つた。

私は「ハイ」と答へて敬禮したが妙に涙が出て仕方がなかつた。軍隊に入つてから二週間、こんなことで注意をうける自分の姿が情けなかつた。

寢臺に入つても寝つかれなかつた。

今日の失敗は明日から必ず氣をつけよう。

頑張らなくてはならない。こんなことで、どうするのか、私は私の心を自分で勵ました。

二月十四日　もう入隊してから一ヶ月になる。光陰は矢の如し等といふが、實際私達が軍隊の御厄介になつてからといふものは、今日は何曜日だか全然考へたこともない。一週に一度廻り来る日曜日が、私達にとつて唯一の暦である。時に無關心であるのではない。そんなことを考へる必要は今のところ不要なのだ。喇叭に起きて喇叭に寝る私達の一日は、今日は何曜日だなんて考へるには、あまりにも餘裕がなさ過ぎる。平時の軍隊生活でも忙しいといふことは聞いてゐた。況

んや今は戦時だ。忙しいのは當り前だ。戰場へ行つて今日は何日だらうなんて呑氣なことが考へられるであらうか、私達が日曜日の廻り來つたことによつて始めて「あゝ今日は日曜日か」と思ひ出される様に、戰場に於ては、恐らく一ヶ月一度の満月が、「あゝ今日は舊の十五日だな」と思はせるのであらう。然し、それも激戦の何日もく續いた時など、そんな風流なことなど言つて居られないと古參兵が語つた。

軍隊に於ける仕事も可成り馴れて來た。勉強する時間も得られるやうになつて來た。入隊當時は、たゞなんとなき忙しく、せはしく、後から後からと追はれてゐる様で、それでゐて、仕事も中途半端であつた。地方でよくいふ、要領が悪かつたのだ。一ヶ月もしたのだ、要領ではないが、仕事の手順もよく行く様になつた。日夕點呼の後兵器の手入が終ると、僅かの時間ではあるが勉強することが出来るやうになつた。

忙しいとか、辛いとかいふことは、軍隊生活に馴れないからだ。今日此の頃で

は却つてその忙しい辛いことが愉快であり、張合ひがあるやうになつた。

此の私を見たら、きつと變つたのに驚くであらう。地方にゐた時は、可成りルーズだつた。暇さへあれば、本を讀んだり映畫を見たり碌なことはしなかつた。それは悪いことではないまでも、私の生活の一部分としてはあまりに餘裕がありません。

軍隊は規律が正しない。私にとっては誠によい試煉である。性根から叩き直すには最もよい時である。私は軍人になれたのがとても嬉しい。

二月廿八日 久し振りの日曜の様な氣がする。前週の日曜は、教練があつたので、休むことがなかつた。いつの日曜日もさうだが、午前中は必ず教練がある。月月火水木金の氣構へだ。第一線の戦友や先輩のことを思へば當然のことだ。どんな辛いことでも、やると氣構へれば出来るものだ。「成せばなる、なさねばならぬ何事も、なさぬは人のなさぬなりけり」と班長殿は常に言はれてゐる。

平凡な言葉だが、眞理がある。眞理はどこまでも眞理である。私達はこの眞理に叛いてはならない。

午後からは面會が許される。今日は珍しく母が面會に来てくれた。班長殿の許可を戴いて面會所に入つた。面會所は營門を入つてすぐ左側にあつた。

「森伊佐雄、面會に來ました」

私は母がみてるだらうと思つたので、一層元氣よく衛兵所で答へた。

面會所は既に一つばいだつた。子供連れが多かつた。兄に、弟に、或は父に夫に面會に來たのだらう。

私は母の前へ行つて擧手の禮をした。母は驚いて、あはて、私にお辭儀をした。私は母のさうした他人行儀がおかしくてならなかつた。母の背中には、末の妹がお負さつてゐた。妹は私の軍服姿を見て異様に思つてゐたらしい。

話は、畑の事、田圃のこと、或は友人のことなど、それからそれへと盡きるを知らなかつた。

「肥ったね」

と思ひ出した様に言った。

「食べ物が足りない様なことはないかね」

母は妙なことを尋ねた。私は軍隊の食事は栄養價が豊富で、決つてゐて、寧ろ地方にゐる時よりも御馳走があることを母に説明してやつた。

「お前は家にゐた頃、大食ひだったからね、お母さんも心配してゐたのですよ」

母は私がいままで子供だと思つてゐるのかも知れない。私は今立派な帝國の軍人である。母から子供をあやす様な言葉を聞くと、何かしら母の慈愛の深いことが感ぜられて胸一ぱいになつて來た。こんな平凡な言葉が暫く會はなかつた母の口から聞かれたのだ。私は嬉しかつた。たゞ無性に嬉しくつて、誰も見てゐなかつたら母に縋りついたかもしれない。

「洗濯は馴れたかね」

「洗濯もお針も一人前になつたよ、もう下手な女の人になど負けなないよ」

母は聲を出して笑つてゐたが、その笑顔の眼の奥にはキラリと光るものがあつた。笑ひにまぎらはして時々ハンカチで目頭を拭いてゐた。

遠く離れて始めて知る母の愛、私は今しみじみとそれを悟つた。

背中の小さな妹は、私がバアツとあやすとケツケツと笑つた。三日見ぬ間の櫻かなではないが、少し見ないでゐるうちに大きくなつた様な氣がした。

今日は空模様が悪い。郷里の方では雪でも降つてゐるだらう。母に聞くのを忘れたが、母の着物の裾が雪解けの泥で汚れてゐるのを見た。或は吹雪であつたかも知れない。その吹雪の中を遙々尋ねて來てくれた母。私は言ひ知れぬ感慨にふけた。

三月五日 天氣は上々だ。難を言へば風が寒すぎる。

入隊後初めての射撃の檢閲が臺の原で行はれた。私の班は中隊で一番射撃がうまいとの評判だつた。その評判を實際に見せる時が來たのだ。

補充兵の全部が教官殿に引率されて臺の原に至つた。

「しつかりやれ。射的だと思ふな、射的の一つ一つが米兵だと思へ。一發必中、仇敵米英を討つは今なりの氣概でやれ」

と教官殿は言はれた。私達は一生懸命だつた。他の中隊に負けないなどといふ狭い心はふつ飛んでしまつた。米英を射つのだと思ふと心は自ら堅くなるのであつた。堅くなつてはいけない、たかゞ米英兵ぢやあないかと心に思ひつゝ、引金を引いた。命中した。米兵の一人を倒した。私は心に凱歌を奏した。元來射撃には自信をもつてゐたが今日の様によく當つたのも珍しい。この分で戰場へ征つたら、見敵必殺、米英兵一人残らず射ちとつてくれんと力んだ。

教官殿は私達の中隊が、またしても一番の成績だつたので頗る満足の様子であつた。兵として殊に部下として上官の喜ぶのを見ることは何よりも嬉しいことだと思つた。

三月二十一日 日曜だが、少し仕事があるので外出をやめた。古參兵の人達は午後から外出した。班内はひつそりとしてゐる。居残つた人々にもそれ〴〵面會人があつたので班にゐたのは私の外二三人だつた。郷里の父や、戦地の友人に久し振りで葉書を書いた。軍隊へ入つてから、書かう〴〵と思ひながら、つい多忙に追はれて御無沙汰だつた。二時から酒保があると云ふので、急いで葉書を書き終つた私は、戦友と連れだつて酒保に行つた。

酒保は兵隊にとつて一つのオアシスである。子供にかへつた兵隊達を喜ばすのはこの酒保が随一である。軍隊生活をした人でこの酒保の門をくゞらない兵は一人もない。

今日も相變らず満員であつた。三時から餅菓子を賣るといふので、相當長い列が出来てゐた。

北野が甘酒を二杯買つて來た。自分と私の分だ。一杯十五錢の甘酒は温くて頗る美味しかつた。郷里にゐた時私は甘酒はあまり好まなかつた。好まないと云ふ

より寧ろ嫌ひの方だった。甘酒に限らず私は偏食家だった。しかし軍隊はさうはいかない。好き嫌ひを言ふことは勿論出来ないし、又好きだからと云つて多く食ふことも、嫌ひだからと云つて食べずにゐると云ふことも出来ない。だから私は軍隊に入つてからと云ふものは何んでも出されたものは片端から食べた。特に一日の教練を終へてお腹を空かせて歸つて來た時、食物の美味いことはたとへやうがない。今日の甘酒もさうだ。平素なら甘酒等見向きもしない私が、今日はとても美味しく飲んだ。

酒保の窓越に見る庭園はなか／＼優雅なものである。殺風景だと思はれる軍隊にもかうした優雅な庭園があるのだ。

藤棚の下で、外出用の軍装をした一つ星の二人の兵隊が、一人は他の一人の肩へ手をかけて、いやに氣取つて寫眞を撮つて貰つてゐた。日曜日と寫眞屋は附物である。街の寫眞師で特に管内出入を許されてゐる寫眞屋が、決つた様に藤棚の下に庭園を背景として三脚をすゑて待つてゐるのである。今日も幾組かの兵が寫

眞を撮した後らしいが、この一つ星の後にはまだ三四組が待機してゐた。

甘酒を飲み終つた私と北野は、

「おい、二人して寫眞を撮らうぢやあないか」

とどちらからともなく言ひ合つて藤棚の下へ行つた。

先程待つてゐた連中はもう終つたと見えてゐない。すぐ私達の番である。

「一つ偉らさうに寫して下さい」

と北野が言ふと、寫眞屋さんは愛想よく

「この邊にお並びなさい」

と藤棚の下のベンチの傍へ私達を案内した。私達は下手な役者の様に氣取つて撮つて貰つた。果してどんなに寫つたか、早く見たいものだ。

酒保では餅菓子を賣り始めたらしい。一時にどうとぎはめき出した。

夜、書簡が來たと週番殿が知らせてくれた。誰からかしらと、急いで事務室へ行つた。俊夫君からだつた。

軍隊へ入つてからは、郵便の來ることが一番楽しい。わけでも親しかつた友人からの便りは殊更だ。私は幾度も讀み返した。

内地に居てさへこんな便りを欲して居るのだ。戦地の兵隊さんが内地からの便りを何より待つてゐる氣持ちがよく分る。これから暇を見つけて一生懸命、戦地へ慰問の手紙を出すことにしよう。

四月一日 吹雪の朝も、雨の日も猛烈に訓練した銃劍術の腕前を見せる時が來た。今日は大隊の銃劍術大會のある日だ。朝早くから、午後の大會の爲めの最後の猛訓練だ。防具を着けた兵隊さん達の眞剣な有様は、米英打ちてし止まむの氣概が十分見えてゐた。

この大會に優勝すると褒賞休暇が貰へるのである。それは必ずしも兵隊の闘争心を煽るためばかりではなかつたが、とに角中隊の選手は勿論のこと、古參兵や一般兵達も猛烈な稽古をした。私達補充兵は、教練を休んで見學することになつた。

「勝負は時の運だなんてそんな氣持ではいけない、何の勝負でも一旦敵と對した時は、是が非でも勝たなくてはならない。勝つための勝負だ」と中隊長殿が言はれた。即ち必勝の精神である。

鈴木上等兵が昨夜夢で、私達の中隊が優勝して全員外出したところを見たと言つてゐたが、この言葉は中隊全員に吉報だとされて一般兵の士氣が大いに昂つた。

試合は第三機關銃隊の舍後で行はれた。

兵隊たちは試合場を圍んで試合開始の時間を待つてゐた。

大會は大隊長殿の開會宣言によつて開始された。總當り八本で、その中六本以上勝つた者に褒賞休暇が出るのである。

最初下士官以下の試合で、班長殿を始め、大場上等兵殿、鈴木上等兵殿が活躍した。白熱の試合は次から次と繰ひろげられ、私達は其の都度、懸命なる應援を惜しまなかつた。

一試合が終る毎に大隊長殿は頷いて居られた。營門の傍を通る地方人が珍しげに、垣の隙間から覗いてゐた。

私達は一試合が終る毎に、班の選手の後へ廻つて肩をもんでやつたり、水を汲んで來たりした。班の選手が勝つた時等自分が勝つた様な氣がして嬉しくてならなかつた。

軍隊の銃劍術は峻烈である。全て型破りである。形式的の技術より實戰的な技術を尊ぶのである。恰も魂と魂とが相搏つのである。肉彈相搏つといふ言葉があるが、將にその通りで、寧ろ壯絶其の極に達してゐるとも言へる。すべては明日の戦場の爲めだ。

私達の熱烈なる應援にも拘らず、中隊の旗色は悪かつた。

あんなに猛練習をして、しかも腕に自慢の古參兵たちが出場したのだったが、中隊の成績は第三位であつた。

隊長殿は幾分あせり氣味であつた。私達はどうしてよいか分らなかつたが、と

に角前よりも一層馬力をかけて應援した。

私達の應援が眞劍になるに従ひ、俄然、旗色はよくなつた。見習士官の部に入ると、今までの負色はどこへやら、出るもの出るもの皆凱歌を奏するのだつた。午前中の負色は午後になつてすつかり挽回されて、斷然第一位を獲得した。わけでも教官殿の奮戦は物凄いものがあつた。獅子奮迅といふか、あの小柄の教官殿の必死の奮闘は、將に劍聖宮本武藏を想はしむるものがあつた。

私は、一試合に凱歌を揚げて控へ場へ戻つた教官殿の後ろに廻つて、力一ぱい肩をもんだ。

「誰だ！」

教官殿は驚いた様な顔付で私を振返つて見た。

「あゝ、森か、ありがたう」

私は一寸した機轉で教官殿の肩をもませて戴いた事が非常によいことをした様な氣がして心は朗かであつた。少しでも教官殿に盡すことが出來てよかつたと思

つた。

「石井見習士官——〇〇見習士官」

進行係の准尉殿の呼び聲に、教官殿は再び竹刀を握つて立ち上つた。

夕闇は漸く迫つて來た。雄詰神社の森で鳥が鳴いてゐた。試合は愈々此の一番で修了するのである。最後の一番である。是が非でも勝たなくてはならない。教官殿の顔には必勝の決意があり／＼と窺はれた。

二人の見習士官殿は型の如く挨拶した。

審判の號令は嚴として下された。

「えッ！」

帛を裂くような掛聲が兩方から出た。やゝ暫くは双方にらみあつてゐたが、何れに隙を見出したのか、殆んど同時に二人の身體が相寄つた。二人の身體は動かうともしない、恰も大角力のやうに、……これが角力なら水でも入るところだが……審判官が双方を離させようと近寄つた刹那、その瞬間、相手の見習士官殿が

「エイッ」と掛聲諸共教官殿を腰投げにした。

私は「アッ」と思つて、思はず兩手を固く握つた。相手の見習士官の腰投げは見事に極つて、我等の教官殿の身體は宙を飛んでドッと倒れた。劍道といふよりか寧ろ柔道である。しかしそこが軍隊の劍道である。型破りな實戰的な劍道である。相手を倒すことが劍道の極意である。不意をつかれた教官殿の不覺である。しかし私達が「アッ」と叫べんだ次の瞬間、教官殿は飛鳥の如く起き上つて相手の見習士官殿に飛びついた。一瞬の出來事である。

二人の鬪魂は再びもつれ合つた。

審判官は懸命に双方を見守つてゐた。

二合、三合、あゝ遂に最後の榮冠は我に輝いたのだつた。教官殿が打ち下した真向ふ唐竹割の一本は見事に相手の見習士官殿の面を打つた。

「勝負！」

審判の准尉殿の聲があつた。

「萬歳！」

私達は豫期してゐたことながら、勝つた嬉しさに思はず大聲で萬歳と叫んだ。「おめでたう！ おめでたう！」

隊長殿は兵隊を前に、おめでたうを連發した。誰の顔も喜びに溢れてゐた。中隊は優勝したのだ。

——戦ひは勝たなくてはならない——隊長殿の平素の訓示が思ひ浮ばれて、私の眼は熱くなつた。

責 任 感

不 覺

練兵場は相變らず風が強かつた。

横なぐりに吹きつける風は、練兵場の砂を含んで顔にあたる度に痛かつた。雪解けの水が凍つてゐた。冷たい！ 銃を持つ手がしびれる様な日だつた。

こんな日に限つて何かしら事故が起るものだ。私はそんな不吉な豫感に襲はれた。果せるかな私の悪い豫感は的中した。

輕機班の戦友が輕機の脚を折つてしまった。

教官殿は直ちに全員を整列させて、

「今日の教練の態さまは何んだ、それでもお前等は〇〇健兒か、これしきの寒さが何

んだ。お前等の今日の様子を見てみると、恰度魂の抜けた兵隊だ。寒いには違ひない、教官も班長も寒いと思へばこそ、少し大目に見てやればこの態だ！こんなことで北満に出動出来ると思ふか、北の護りにつけると思ふか！」

興奮した教官殿の軍刀を握った手がふるへてゐる。滅多に怒つたり、興奮したりすることのない教官殿である。それが今日は非常に興奮し、怒つてゐるのである。私達は教官殿のお怒りになるのも尤もだと深く悔んだ。

「教官はお前達にこんな教育をした覚えはないぞ。今日の教練はこれで中止する。また今晚の夜間演習も取りやめだ」

私達は何んと言つて返事をしてよいやら途方に暮れた。

教官殿は班長殿に命じて歸隊するやうに云ふと、自分は黙々として歩き出した。いつもなら、駆足か、軍歌練習をして歸る此の道である。歌も歌はねば、駆足もしない。たゞ中隊全體が暗い足取りで黙々と續くのみであつた。

何もいはない教官の態度は、大聲で叱り飛ばされるより私達には寧ろ辛い〜

無言の叱責であつた。

歸營して分れる時に、

「班へ入つたらよく今日の事を考へて見よ」

と言ひ、寂しさうに教官室の方へ入つて行かれた。私達は解散の敬禮をしたものゝ、いつまでも教官殿の後姿を見まもつてゐた。

どんなことが教官殿の氣に障はられたかは推察出来ないが、輕機脚を折つたことだけではないことは臆氣ながら判断出来た。

夜間演習さへ中止するといふ教官殿の胸の中には何かしら割り切れないものがあつたに違ひない。

今日の私達は確かに怠慢であつた。力が入つてゐなかつた。教官殿が日頃から言はれてゐるやうに、「演習だと思ふな、戰場だと思へ」の言葉に叛いてゐたのだ。力の入つてゐない演習、精神の籠つてゐない教練が何になる。ましてやこれしきの寒さが何んだ。北邊の寒氣に比べれば、こんな寒さは物の數ではない。さう信

じてゐたものゝ、矢張り私達の精神には緩みがあつたのだ。

もし戦場に於てかゝることがあつて見よ、忽ちにして敵に乗せられるのだ。

私はそんな風に自問自答した。

班へ歸つた私の脳裡は教官殿にすまない気持ちで一ぱいだつた。中でも氣のきく伊藤は、早速補充兵全部を集めることを提案した。誰も異議を稱へるものはない。私達は班の片隅に集つて協議でもするよゝな體勢をとつた。

「今日のことを御詫びして、今夜の夜間演習をやつて戴くやう教官殿に御願ひに行かうぢやあないか」

伊藤は自分が率先して皆んなを集めた手前、先づ口を切つた。誰も異議を言ふものもない。そこで、伊藤と私と木村が班を代表して教官殿に御詫びと御願ひに上ることにした。

私達三人は先づ班長殿のところへ行つてそのことを話してみた。班長殿はさも満足さうに

「行つてお願いして來い」

と言はれた。

私達は伊藤を先頭に並んで階段を降りて見習士官室の前にたつた。伊藤は恰も仔羊の如く至極おとなしく、軽く見習士官室の戸を叩いた。中から「おゝ」と太い聲で返事があつたので、私達三人は静かに中へ入つた。

二人の見習士官殿が机に向つて何やら書いてゐた。教官殿は机に頬杖をしながら窓外を眺めてゐた。私達三人が入つて來たのでやゝ驚いたかのやうにこちらを向いた。

「第三内務班補充兵、石井教官殿に用事があつて參りました」

伊藤は私達を代表してさう云つてから、

「教官殿に敬禮！」

と號令をかけた。私達は揃つて教官殿に敬禮をした。教官殿は椅子から立ち上つて私達に答禮して下さつた。

「どんな用事か」

といひながら、私達にもつと傍へ來いといふ風に手で合圖された。聰明な教官殿には私達の用件が大概分つてゐたのだらう。

「教官殿、今晚の夜間演習を是非やつて下さい」

私達はすべてを伊藤に任せてゐたので、伊藤は教官殿の机に詰め寄るやうにして言つた。

「何にッ」

教官殿は大仰に驚いた風であつた。

「私達に是非やらせて下さい。口惜しいであります」

伊藤の聲は心なしに濕つてゐるやうに思はれた。私と木村は黙つてうなだれてゐた。教官殿は何も言はないで私達を見詰めてゐた。

二分！ 三分！ 教官殿の返事がない。

「他の班の補充兵がやらないなら、第三班の補充兵だけでもやります。教官殿御

願ひであります」

伊藤は遂に泣き出した。私も木村も眼頭が熱くなつて來た。それでも教官殿は黙つて返事をしない。私の頬に、木村の頬に熱い玉の露が幾つとなく傳つた。伊藤は遂に聲を出して泣いてゐる。何故だか私達には分らなかつたが、泣けて仕方がなかつた。

「教官殿、私達は寝ないでもやります。いくら寒くてもやります。御願ひであります……」

たまり兼ねて私はさう言つた。伊藤に萬事任かせてあるものゝ、この場合私とて黙つてゐる譯にはいかなかつた。木村も亦聲をしぼつてお願ひした。伊藤と木村と私の熱心なる願ひに教官殿は漸く口を開かれた。

「お前等の心は教官にはよく分る。教官は泣ける程嬉しい。だが教官は怒つて止めたのではない。教官には教官の考へがあつたからだ。もうよい、歸れ」

教官殿はやさしくさう言つて、ふと横を向いて眼頭に指をあてゝゐた。

「でも……」

言ひかける伊藤の言葉をおさへるやうに

「お前達のさうした氣概は夜間演習をやつた以上の收獲だ。その意氣がなくてはならない。心配せんでもよい。その代り明日からの教練は、これに倍して頑張るんだぞ」

私達は返す言葉もなく、聲を上げて泣いた。

「教官は侍せた。よい兵を持つて侍せた」

教官殿は獨言のやうにさう言つて、窓の外を流れる雲足を眺めてゐた。

露 營

軍隊生活の愉快なこと、面白い事等は一生忘れることが出来ないといふ地方にゐる時よく聞かされたものだ。その愉快であり面白いことの一つに行軍があり、演習

がある。面白いとか愉快とかいふ言葉はあて嵌まらないまでも、兵達にとつて行軍は又嬉しいものの一つである。

部隊の補充兵と一般兵の對抗演習が二日間に亘つて七ヶ濱附近で行はれることになつた。まだ行つたことも見たこともない土地へ行つて、そこで演習をやるのだ。兵たちの心が躍つたのも無理はないことだつた。

霜柱のたつたやうな田圃道を歩くことさへ楽しいのである。恰度十六七歳の娘さんが、何をしても面白く愉快である時代があるやうに、新兵なり補充兵にとつての行軍なり演習は何んとも言へぬ楽しいものである。

平凡な田舎の景色が又頗る絶景に見えるものだ。私は子供の時の遠足のことを想ひ出した。先生に連れられて行つたあの時の遠足の楽しかつたこと、それが、今の私達の行軍の心である。野道に名もない花が咲いてゐるのを見つけて、無意識に列を離れてその花をとつて班長殿に叱られる兵もあつた。あつちの山、こつちの河、何れも私達兵隊にとつては楽しいものばかりだつた。

殊に國民學校の兒童等が峠道に並んで萬歳など言つてくれる時は無性に嬉しかった。

七ヶ濱へ行く途中は梨の名産地と見えて、山の端から、梨の棚がすつとく續いてゐた。その梨の木の下には麥が眞青に延びてゐた。あそこでもこゝでも麥踏みに忙しさうであつた。兵達の行軍に氣がつくと、踏んでゐる足を止めて、私達を見送る娘もゐた。

梨畑の間に一筋の道がある。この道を行軍してゐるのである。そのうちに「海だッ」

と云ふ大きな聲がした。瞬間私達は夢から覺めたやうな氣がした。

梨畑の中の道の切れ目から少しばかり碧い海が顔を出してゐる。遠いので浪の音は聞えないが、波頭が白く光つてとても美しい。私の疲れた足はその波頭に躍らされるやうであつた。

梨畑が漸く切れたと思つたら、ゆるやかな傾斜の山の頂きへ出た。こゝからは

海は一目瞭然である。部隊はこの頂きで小休止をとつた。

寒中だといふのに、私達の軀からは玉の汗が流れてゐた。帽子をとつて風を入れた。何んとも言はれぬよい心地である。班長殿が

「あの波の打ち際のところに、松並木があるだらう、あれが目的地の七ヶ濱だ」と説明してくれた。

目的地が愈々眼前に來たと思ふと、私の疲れは一瞬に飛んで行つてしまつた。

小休止の後の行軍は、俗に云ふ一瀉千里であつた。それにこゝからはすつと下りである。

目的地の七ヶ濱は、海岸には違ひないが、東海道あたりで見える様な白砂青松の海岸ではなかつた。山又山の谷間に綴在する部落、その部落のある所だけが平地である。海岸はこの山の裾を縫つてゐた。

第一日目は陣地構築であつた。私達擲彈筒班はあまり高くもない松林の丘に陣

取つた。陣地の構築は始まつた。私達は附近から木の枝や草の葉などをとつて来て偽装した。一つ隔てた向ふの小高い山には友軍の重機班が陣を張つてゐる。演習は既に始つてゐるのだ。

夕暮の冷い風が肌にしみる。腹がすいた爲めか薄ら寒さを感じた。しかし状況中止の命令が来ない以上、無断でこの陣地を離れることは出来ない。私達は一生懸命に陣地構築をした。やゝ暫くあつて漸く陣地構築が終つた頃には夕闇はすっかり山々を包んでしまつた。

目の下の部落に電燈が灯されたやうである。一燈、二燈、チラホラと見える。

陣地の中で次の命令を待つてゐた。その間戦地歸りの分隊長殿がかつて敵前に陣地を構築した時の壮烈な話をしてくれた。

ザアー　ザアー

波の音が静かに聞えてゐる。と突然下の方の草叢を分けて二三人の女の人があつて来た。薬鐘を持ち、飯櫃を持つた内儀さん達であつた。私達のところへ来て

「さ、お食べられへんや」

と言つて、持つて来た飯櫃のふたを取つた。中には珍しい海苔を卷いた餅とごま鹽のお握りがどつきり入つてゐた。

「さあさ、早う食べてくはなはれや」

小さな乳飲兒を背負つたお内儀さんが、しきりにすすめてくれた。私達はどうしてよいのか、又何んと言つてよいのか分らなかつた。

「これはどうも恐縮です。こんなことをして戴いては困りますね。私達は食事は携帯してゐますから……」

分隊長殿が漸くそれだけ云ふと

「そなことはすに早う食べてくはなはれや、折角持つて来たんだもやな」

とその中の老婆が、他の女達の同意を求めらるやうに云ふと、他の女の人達もそれに合槌を打つて私達にすすめてくれた。

「ぢやあ、お言葉に甘えて頂戴しますかな。おい皆んな、折角ぢや、御馳走にな

れ」

私達は分隊長殿の言葉に、遠慮なく素手でお握りや、海苔餅をいたゞいた。

女の人達は持つて来た茶碗にお茶を注いでくれた。熱いお茶がなんといふ香しいことであつたらう。海苔の香と一緒に實に美味しい。私達の食慾は一時に爆發した。眞黒い手があつちからもこつちからも握り飯を掴んだ。

「配給米を減らして……本當にすみません」

分隊長殿が眞からすまなさうに女の人達の言つた。私達の食慾旺盛に分隊長殿は驚いたことであらう。

「なあに、おい達なんかは一食や二食は食はなくても兵隊さんにだけはな……それが銃後の人の務めですな……」

老婆はさう云つた。この老婆には二人の伴があつて、しかも二人とも今戦地へ行つてゐるとのことだつた。それだけに私達兵隊のことも自分の子供の様に思つてゐたのだつた。

「わしの伴も、戦地でみんなのやうに元氣でやつてるべな」

眼をしばたいて居た。私にはこのお婆さん達の心盡しが身にしみて有難く、拜みたい程であつた。二人のお内儀さんの夫も召されて征つたさうだ。この女達は伴や夫の征つた後の家事の一切——畑も耕せば漁にも出た——を女手で切盛つてゐるのだ。一億國民が火の玉だ、米英撃滅に前線も銃後もない。國民の全體が一家族になつて戦争完勝に邁進してゐる時、こんな田舎にも、かうした軍事思想が普及されてゐるのだ。いやこれが、眞の日本人だ。誰に教はらなくとも、何千年の昔から傳はる大和魂の精華なのだ。

女の人達の心盡しの御辨當を綺麗に平げた私達は心からお禮を言つた。

もうすつかり夜である。向ふの丘の重機の陣地からは飯盒を炊く火が見える。

女の人達は空になつた飯櫃や薬罐を持つて暗い山道を歸つて行つた。

「御馳走でした」

私達は幾度もく同じことを繰返しく言つた。言葉では到底盡せぬものがあ

つた。

暫くしてから状況中止の命令が出た。私達が部落へ入つたのは九時頃であつた。七ヶ濱の部落は實に静かだつた。私達はそこで露營の夢をみるのであつた。

——露營、生れて初めての露營である。戦地へ征けば恐らく毎夜／＼露營であらう。いや露營も出來ず、夜を徹して攻撃する場合が多いのだらう。それを思へば、こんな時の露營は寧ろ心地よいものである。

對抗演習

草を枕に、始めての露營にまんじりともしなかつた。突如！ 行動開始の命が下つた。暗くて腕の時計の文字が讀めない。それでも、誰か〆四時だと言つたので始めて時間が分つた。冬の四時、わけても山峽の四時は眞暗である。

夜明けの明星が一つだけ大きく輝いてゐた。私達は早速配備についた。

前方の小山の重機隊でも戦闘準備に入つたことであらう。しかしそれにしてはあまりに静かである。

春にはまだだいぶ間があるので、朝の寒さ、冷さは又格別である。焚火でもしたいくらゐた。だが今はそんな暢氣な事を言つてゐられない。既に戦闘は開始されたのだ。何時、敵の伏兵が現れるか分らない。私達は全神経を針の様に尖らせて前方を警戒してゐた。

突然、頭の上で、ガサツといふ音がした。サアツと私達の緊張した神経が活動を開始しやうとした。驚いてはいけなない。埒を離れた無名鳥が、今飛び出したのだ。夜明けまではほんの僅かの時しかない。

霜が降つたらしい。草が皆んな凍つてゐる。擲弾筒を握る私の手が痛い。

向ふの山肌が薄いベールをかむつてゐる様に見えて來た。一枚々々そのベールが剥がれて行くやうな氣がする。

おゝ、朝だ。洋々たる大洋の彼方から、今しも偉大なる太陽が顔を出した。壯

殿といはふか、神殿といはうか、その美しさ、その力強さ、擲弾筒を握る私は心から御來迎を祝福した。海は今眞赤に染まつた。

山々は今、全く眠りから覺めた。朝の活動が始つたのだ。

ダダダーン……

朝の静けさを破つて突如銃聲が聞えて來た。私達は瞬間に身を伏せた。小銃の音、機關銃の音、擲弾筒の音、炸裂する彈丸の音は山々に弐して物凄く、眞の戰場を思はせるものがあつた。

私達は地に伏せつたまゝ全神経を前方警戒に集注した。

私達にはまだ命令が來ない。何か物足りない。早く撃ちたい。

敵味方の打ち出す彈丸の音は相變らず熾烈を極め、豆を炒るやうだ。山の下の方で時々喚聲が聞えた。

外套を頭からすつぱりかぶつた部落の人達が、珍しさうに見物に登つて來た。

分隊長殿は双眼鏡をはなさない。

戦機は愈々熟して來た。

向ふの山の友軍、重機隊から火蓋が切られた。自動火機がそこゝから火を吐き出した。

「右の山下の敵ッ……」

四百五十……」

分隊長殿は始めて號令を下した。

私は、はつと我にかへつて、思はずしらすに筒を固く握り締めた。彈薬手が素早く彈を込めた。

「準備終りッ」

「射てッ！」

バン／＼／＼

鳴りを潜めてゐた擲弾筒が、猛けり狂つた。見よ、前方の山の下下の松林の中を、そこには約一千の敵の部隊が我に向つてやつて來るではないか。

わあッ！ と重機陣地の方にあたつて突撃の聲が聞える。友軍は今白兵戦にうつつたのだらう。

私達の擲弾筒は休む暇もなく打ち續いてゐる。實戦だ。私は私自身にさう呼びかけて見た。演習ではない、實戦なのだ。前方の敵はまさしく米英だ、一發の彈丸と雖も無駄に撃つてはならない。百發必中、全敵を倒すのだ――。

味方の重機陣地は破れたらしい。敵兵は重機陣地を抜けて私達の方へ向つて來た。

「射ち方止め。筒手は劍を抜け、分隊長の命があるまで飛び出してはいかんぞ」
分隊長殿は白兵戦を覺悟したらしい。私は劍を抜いた。おゝこの劍、これぞ降魔の劍である。懸て來る日にはこの劍を持つて鬼畜の如き米英兵を突きまくつてやるのだ。――さう思ふと何にかしら言ひしれぬ緊張した氣持ちに襲はれた。

ジイッと草の上に伏してゐた私には、敵方の一分隊位が私達のゐる山の方へ登り始めたのがよく見えた。この頂に、私達の擲弾筒陣地があるのを知らぬらしい。

――ようし、來るなら來て見ろ――。

私はさう力んで見た。先登を登つて來る敵方小隊長の軍刀が朝の太陽に映じて時々ピカリ／＼と光を放つてゐた。

又してもワアッといふ喚聲が一つ向ふの山から聞えて來た。

私達は前方の敵方と分隊長殿とを交互に見守つてゐた。分隊長殿からの合圖を待つてゐたのである。敵を十分手近に引寄せてから一舉に倒さうとする分隊長殿の作戦らしい。満を持してゐるとはこのことであらう。たゞ私達の心は次に來る突撃のために異狀の亢奮をしてゐる。

一分――二分！ 分隊長殿が眼で合圖をされた。

突撃だ！ 突込め！

誰れからとなく、ワアッと大喚聲を擧げながら草叢を蹴つて飛び出した。

敵方は廿米、いや十米くらゐだ。目と鼻の先きに敵方がゐるのだ。私の亢奮した眼には、敵方に廻つてゐる同僚が米英兵に見えて仕方がなかつた。

「この野郎！」

私はハッと思つて持つた剣を突いた。私達の眞剣と言ふか、殺氣を帯びた突撃に、敵方の小隊長は「止め！」と手を舉げた。危いところで私達も止まらうとしたが、何にしる小高い山の上から下への突撃である。さう急には止まれない。反動といふか、餘勢といふか、とに角私達はその敵方の中を突き抜けて向ふの松の根方まで走つてしまつた。

「お前達の奇襲に合つて俺達は全部戦死だよ」

敵方の小隊長はそんなことを言つてゐた。本當にこれが演習だからよい様なものゝ、もし實戦であつたら敵は必ず全滅してゐたのだ。あとになつてからの事だが、教官殿がこの話を聞いて、さも満足さうにニッコリと微笑んだとの事だ。

太陽は可成り上つた。向ふの山の上でも突撃が始つたらしい。ワアッと喚聲が起つた。こつちの山からは豆を炒る様にポン／＼と銃聲が聞えてゐる。

突如！ 休戦喇叭が晴やかに鳴り響いた。向ふの山に銜したり、こつちの山に

銜したり――。

海から吹いて來る風は生暖かつた。數時間の戦闘にびつしよりとかいた汗、胸のボタンをはずして思ふ存分大氣を吸つた。

検 閲

死生を貫くものは崇高なる獻身奉公の精神なり。

生死を超越し一意任務完遂に邁進すべし。

身心一切の力を盡し、従容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし。

――戦陣訓より――

師團の隨時検査があつた。師團長閣下が御出でになり、部隊全般を御検閲なさ

れるとの事だった。

部隊全員は完全軍装をして營庭に整列して師團長閣下の御檢閲をうけるのだ。補充兵たる私達は、日頃、師團長閣下は私達の家族の長であると教へられてゐた。私達はその師團長閣下に親しみを感じ尊敬してゐたのだ。今、閣下の御檢閲を願ふことになる。私達は言ひ知れぬ感激と緊張に、ともすれば固くなりすぎてゐた。平素よりは念入りに軍装した。——今、お召しがあれば、この儘征途につくことが出来るのだ。これ以上の武装はない。恰も出陣の朝のやうだ。かつて初年兵が、私達のこの軍装と同じ軍装をして、晴れの壯途についたことがあつた。その事を思ふと、このまゝ私達も、米英撃滅の壯途に上りたい様な氣がしてならなかつた。

戦闘帽が何列もくゞ並んだ光景は壯觀といふか、絢爛といふか、將に大東亞戦下の繪巻物である。日頃の猛訓練に鍛へに鍛へた私達である。不日征途にのぼる日を夢見つゝ、日夜常在戦場の氣持ちで奮闘してゐる兵隊である。その凜然たる

姿には、師團長閣下もさぞ御満足をなされたことであつたらう。

閣下は幕僚を従へて、私達兵隊の間を通り過ぎた。私の二三人手前に來た閣下は急に歩を止めて、その補充兵に質問した。

「お前は常にどんな心で軍隊生活をしてゐるか」

その補充兵は突然の質問に面喰ふこともなく、自信に満ちた顔で直ちに答へた。

「ハイ、軍人として正しい立派な死にかたをしたいと思つて居ります」

「さうだ、その意氣を忘れてはならぬぞ」

と閣下はさぞ満足さうに、その補充兵の肩を叩いた。閣下はこの補充兵から、こんな立派な答をきかうとは思はなかつたに違ひない。

「死」は帝國軍人の信念であり、精神でもある。死は人生の一大快樂でもあるのだ。吾等一度び召されて軍人となる、何んぞ死を恐れよう。葉隠にも「武士道とは死ぬことと見つけたり」とある。私には難しい哲學は分らない。けれど、今の

私の心の奥には寧ろ死を讚美する力強いものが宿つてゐた。

天皇陛下の御馬前に従容として死に赴く姿こそ尊いものだ。またそれが軍人に與へられた最大の名譽なのだ。軍人の精華なのだ。私はお召状が來たその日から既に死ある日を願つてゐたのだつた。

不 寢 番

不寢番も思ひ出の勤務の一つだ。不寢番とは文字の通り寢ずの番である。

私が不寢番の勤務についたのは、入隊してから一ヶ月許りたつてからの事であつた。

私達の不寢番は一時間交替の勤務であるが仲々責任が重いのである。

不寢番の服務は二名で、一人は玄關入口を定位置とし、他の一名は舍内を巡視することに守則が出來てゐる。火災、盜難の豫防、衛生並に出入者に注意するこ

とも不寢番の任務である。

上番、下番とある。軍隊では、これから勤務につかうとする者を上番と言ひ、勤務を終つて歸る者を下番といふのである。

上番者は下番者から守則その他の事項を申送られるのである。たとへば不寢番の場合は、先に述べた不寢番の任務(守則)を述べ、更に

——〇〇上等兵四時に起すこと

——〇〇一等兵感冒、一時間に二回冷せ

等と申送るのである。

一日の教練でぐつすり寢込んでゐる時、下番者に「おい／＼起きろ／＼」等と揺り起される時など非常につらい事ではあるが、不寢番といふ任務があるから、睡い等と言つてゐる譯にはいかない。すぐ様飛び起きて任務につくのである。

舍内は静寂そのものである。時々、もれる躰が、静けさを破つてゐる。私はなるべく足音をさせまいと思ひ、軽く足を上げながら舍内の巡視を始めた。

暗い營庭の向ふ側に、幾棟かの兵舎が並んでゐる。どの兵舎も殆んど電燈が點つてゐない。時々窓越しに、にぶい灯の見えるのは、私と同じやうに不寝番が廻つてゐるのだらう。

昔の兵隊の不寝番勤務の話をしきくと仲々面白い。今の不寝番とは大きな違ひである。私は且つて准尉殿が兵隊當時の思ひ出を話してくれたことを想ひ出した。

當時——大正末期——の不寝番勤務は一夜を二人で交替に勤務した。即ち上番者が消燈後から午前一時頃、下番者は一時頃から起床までとなつてゐた。今の一時間交替と比べると大變長い勤務である。

上番者は消燈後すぐから勤務につくのであるからそんなに睡いやうなことはないが、所謂、草木も眠る丑滿時になると、いや睡いの何んのと、恐らく兵隊でない人達は想像も出来ない位に睡い。睡いからと言つて勝手に眠る譯けにはいらない。何んとかして睡氣を覺さなくてはならない。そこで色々と工夫して睡氣ざましをやる。或る時は自ら頭を柱にぶつけて眼を覺ます。それでも駄目だと逆立ち

をやる。逆立ちをやつた位ではどうにも眼がさめぬ。表へ出て、凍りつめた洗面所で顔を洗ふ。いやはやその苦心と言つたら、到底想像も出来ない。歩いてゐるが半ば眠つてゐると言つた状態であつたといふことである——。

今の不寝番はそれ程苦心しなくてもよい。それでも夜中の勤務は可成つらい。つらいからと言つて怠ける譯にはいかない。今は舍内の不寝番ではあるが、若し一朝、敵を前にしての露營の不寝番であつたなら、睡いとか疲れたからとて勤務を怠つてゐたのではどんな結果になるかこれは私が言ふまでもなく想像されることである。自分一人の怠慢は部隊の全滅を招くことになる。

それを思へば、營内の不寝番と雖も責任は重大である。すくなくとも中隊全員の保全を願ふためには身も心も緊張しなくてはならない。全部の兵隊が、晝の教練や勤務のために安らかな夢路をたどつてゐるのだ。しかもこの安眠が明日の活動の力を得るものとすれば、私の巡視の足取りも自ら靜かに靜かとなるのである。

戦友たちの心地よい寝息がともすれば睡魔となつて私を襲はうとするが、そんな睡魔に負けてはならぬと自らを勵まして巡視してゐると、突然、

「始め！ タ、タ、テ、ト、タ……」

と可成りの大声がした。私はハツとして班内を見廻したが誰も起きてゐる兵はない。不思議に思つてゐると、こんどはすぐ私の立つてゐる右側の兵が

「タ、タ、テ、チ……」

と始めた。豫期してゐたので驚きはしなかつたが、ふとその兵の方を見ると、去年入隊した戦友の寝言であつた。

戦友は右手を毛布から出して唇にあてゝゐた。その表情は何となく苦しさうだつた。

私はそつとその右の手を毛布の中へ入れてやつた時、ふと私の脳裡に泛んだのは、その戦友の尊い姿だつた。私はハツと思つた。

——さうだ、この戦友は喇叭修業兵だつたのだ。きつと喇叭習練の場面の夢を

見てゐたのだらう。夢の中にまで自己の職務に忠實なのだ。手を唇にあてゝゐるのはきつと符を讀んでゐたのだらう。常日頃から眞面目な此の戦友殿は、立派な喇叭兵にならうと努力してゐるのだ——。

私はさう思つた時、起してやらうかとも思つたが、——いや、折角、夢の中にまで練習をしてゐるのだから——と思つてそのままにして、次の部屋へ廻つた。それにしても、私はまだ不熱心なのか、未だ軍隊生活の夢を見たことがない。私は寧ろ時々郷里の夢を見ることがあつた。

こんなことではいけない。私はもつと／＼軍務に忠實でなければならぬ。一度び御召に應じて軍人となつたのだ。この身は既に 大元帥陛下に捧げまつてあるのだ。故郷の夢など見てゐる場合ではない。立派な軍人となつて皇恩の萬分の一だに酬いなくてはならない。

兵器尊重

各個戦闘教練が始まる頃になると、私達の擲彈筒班は學科に實科に愈々難しく且つ忙しくなつて來た。

戰場に於ては歩兵は是非共擲彈筒を必要とするのである。いはゞ、擲彈筒は歩兵の虎の子である。それだけに私達の教練は一層激しかった。他の兵に數倍して練習を勵まなくてはならなかつた。

それは肉體的にのみでなく精神的にもさうであつた。すべての行動が數學的であつた。だから私の様な無學なものは、その數學的問題にぶつつかつて苦しめられることが多かつた。私は一生懸命にやつた。習ふより馴れるといふ語があるが私は習ひ且つ馴れることに努力した。

分隊長殿から彈丸自體の變流、風による變流などの目標を命ぜられると同時に

分割を修正して報告をするのである。

激動後に行はれる擲彈筒の發射なので即座に報告することが出來ずかなりまごつくことがある。戦闘が激しくなつて、しかも戦闘狀況が刻々と進展して行く時など、氣ばかり焦つてどうにもならない。

計算は間違つてはならない。さうかと言つてあまり落着き拂つて計算してゐる譯けにはいかない。兵は迅速を尊ばなくてはならない。小銃班や輕機班にもそれだけの苦勞はあらうが、擲彈筒班には他の班にない特別な仕事がある。それだけに私達にとつては張合ひがあるといふものだ。

兵隊が兵器を尊重することは前にも述べた通りである。たとへ小さな附屬品のやうなものでも大切にしなければならぬ。

この事は班長殿が口癖のやうに言つてゐた。だから兵隊達も注意に注意をして兵器の取扱ひを嚴重にした。

或る時、畠中といふ戦友が、どうしたのか教練中に擲弾筒の止環を落してしまつた。止環とは小さな輪になつた針金のやうなものであつた。紛失したことに氣のついたのは午後の教練が終つてからであつた。

畠中は非常に驚いて、早速班長殿に届けた。教官殿にも届けた。すると今まで非常に元氣で快活に教導して下さつた教官殿の顔色がサツと曇つた。

止環が紛失されたことは畠中の不注意には違ひないが、さりとて畠中一人の責でもない。班全體の責任である。私達は直ちに手分けして捜査にかゝつた。廣い草原である。あんな小さなものがそんなに早く發見出来る道理がない。早や太陽は西の山に沈んでしまつた。あたりは可成り暗くなつた。夕闇は私達の心配にもかかはらず遠慮なく襲つて来る。

「全員二列横隊に集れッ！」

教官殿の號令である。

「いゝか、今第三班の畠中が止環を紛失したのでお前等が懸命に探した。だが不

幸、この小さな止環は未だに發見されない。しかし、教官が口を酸つぱくして言つてゐるやうに、たとへ小さな止環であつても兵器は兵器だ。兵器はお前達の生命を守るものであると同時に敵を倒す武器だ。その兵器を紛失するといふことはお前達に兵器尊重の觀念が徹底してゐない證據だ、故意に紛失したのでなくとも禍失でもいけない。軍隊では辯解は許されない。若し敵より兵力が劣つてゐたからとか、彈丸が盡きたので戦に負けましたと云ふやうなことは軍隊では絶対に通用しない」

教官殿は可成り怒つてゐるらしかつた。教官殿は口數の少ない人であつた。怒る時も説教する時も簡單であつた。それが今日はなか／＼止まうとしない。當の畠中は大罪でも犯した人の如く神妙にうなだれてゐた。

——畠中、心配するな、皆んなしてきつと探し出してやるから——
私は心の中でそんなに叫んだ。

教官殿は私達に兩眼を閉ぢるやうに命じた。私達は命ぜられるまゝに兩眼を閉

ぢた。教官殿が何故私達に目を閉らせたか私にはよく解つてゐた。

——私達に十分の反省を興へるためであつた。

「兵器は何故大切であり、尊重しなければならぬか分つてゐるものは言へ」
教官殿は私達に兵器の大切なる所以を聞くのである。こんなことは今更質問されることではないが教官は殊更に質ねたのである。

「ハイ、畏れ多くも 天皇陛下から御預りしてゐるからであります」

「兵器は軍人の魂であるからであります」

「兵器は自分等と死生を同じうするものであり、敵を倒すものであるからであります」

私達は眼を閉ぢたまゝ答へた。

「よし、判つたか。眼を開けよ、全員これから止環を探す。お前達は各人が紛失したつもりで探すのだ」

私達はホツとした。持つてゐた銃は直ちに又銃をした。だいたいの見當をつけ

て、全員横に展がつた。草原に四ツん這ひになつた。

私達の眼は枯草の根本に集中された。たとへどんな小さな株の中でも見逃さないやうに懸命になつて探がした。

夕闇は愈々濃くなつて來た。平素ならもう歸營する時分である。

四五日前の雪が解けて所々に水が溜つてゐる。その水に薄氷が張つてゐる。

四ツん這になつてゐるので、掌がヂリ／＼痛んで感覚がない。膝小僧のところ
が丸く濡れて中の方へ浸みこんで來るので何んともいへなく冷い。

冷いとか痛いなど言つてゐる場合ではない。何んとしても探さなくてはならぬ
い。一面の草叢であり、更に日はトツブリ暮れてしまつたので探すのに仲々困難
である。

「発見されるまでは絶対に止めてはならぬ。夜になつても探すのだ」

教官殿も班長殿も私達と一緒になつて四ツん這ひになり、凍てついた草叢の中
を探した。水溜があれば、その水を掬ひ出しても探し出さうとしてゐるのだ。

私達は教官殿のかうした真剣な姿を見ると何んと言つて御詫びしてよいかわからなかつた。すまない——そんな生やさしい事ではなかつた。あまりのことにやや緩みがかつてゐる気分は又しても引締められるのであつた。

畠中は泣き出しさうな表情で、四ツん這ひになつて血眼になつて探し求めてゐた。

「畠中心配するな、大丈夫だ、きつと俺達探し出して見せるから……」

私は畠中の傍へ寄つて行つて慰めてやつた。自分の過失が中隊全部の兵隊にまで及ぼされてゐるのだと考へた畠中の胸中を察してはさう慰めてやるより外に道はなかつた。畠中は私にさう慰められて急に言ひしれぬ感に打たれたものか、兩頬には涙が一筋二筋傳つてゐた。

「あつたぞ！」

誰かゞ叫んだ。私達は一齊に起き上つてその聲の方へ走り寄つた。

遂に發見されたのだ！ 私達はまるで一城一砦を占領した時の様に喜びに満ち

て思はず大喚聲を上げたのだつた。

よかつた。よかつた。これで探した甲斐があつた。

しかし教官殿も班長殿も、何んにも言はなかつた。涙もろい教官殿の眼の奥にはキラリと光るものが見えた。

兵器を尊重しなくてはならない。兵器は私達の生命であり、私達の生命を守る武器であり、敵を倒す武器なのだ！ 私達は今、しつかりと胸の中にそのことを疊み込んだ。

もうすつかり夜だ。黙々として歸營する兵達の胸中は、誰しもこの事で一ぱいだつたと思ふ。

夜間演習

或る夜間演習の時である。

相當寒い晩なので、特に外套を許された。その時は歩哨の夜間勤務の動作の教練であつた。

豫め銃などにはガチャ／＼音のしない様に防音装置を施しておいた。

營門を出て練兵場へ向つた時は、すつかり夜になつた。なんだか曇でも降つて来さうな晩であつた。時間で言へば月の出る頃合だが、そんな工合で月どころの問題ではない。眞暗で一寸先は見えない。

こんな晩がよく敵襲などあるものだと言つて古兵殿が言つてをられた。夜間演習には好都合の空模様である。

毎日、朝から晩まで駆け廻つてゐる練兵場ではあるが、かう暗くては一向見當がつかない。まるで知らない國へ来た様な感じがする。

民家の燈とて、今は戦時下だ。毎夜準備管制下にあるので、殆んど漏れるところもない。死の如き静けさとはこの事であらう。寧ろ無氣味の位である。

こんな暗い中にも、流石教官殿は馴れたものである。私達が足許をさらはれさうになつて歩いてゐるのに、教官殿も班長殿も一向そんな氣配を見せずスタ／＼と歩いて行く。

道々、夜間に於ける方角の見極め方などを教へてくれた。夜間方向を知るのには大空に輝く星が一番よろしいと教へてはくれたが、あいにく今宵は一つの星影も見えない。

戦地にゐる戦ひの合間など、大空の一つ／＼の星に故郷を想ふ兵もあると聞かされてゐる――。何處の果から見る星も、同じやうに輝いてゐるのだ。戦場で見る星も、故郷で見る星も同じ光で輝いてゐるのだ、さう思ふとなんとなく感傷的になつてくるとの事だ。

どうかすると、私達でさへ、月を見、星を見ては故郷を思ひ出すことがある。しかし軍隊に於ては一切の感傷的氣分は許されない。軍人が一つ／＼に感傷に溺れてゐたのでは軍紀は保たれない。無風流と言へば無風流かも知れないが、そこ

が軍隊だ。激戦の合間々々に椰子の木蔭で尺八を吹く風流兵もある。しかしそれらは必ずしも故郷を偲び感傷的になつて奏するものではない。所謂武士の心の餘裕を見せ、明日の激戦の力を養ふためである。

練兵場の一隅に達した時、私達はそこで停止した。私達の隊伍は夜間ではあるが肅然としてゐる。

——ふと私は故郷にゐた時の事を思ひ出した。青年學校の夜間演習の時であつた。指導員が幾ら注意しても若い者同志は仕方のないもの、がやくと騒ぐ。群衆心理とでも云ふか、一人が話しかけると又他が話をする。指導員も終りには、どうでもなれと言つた様にあまりやかましく言はなくなる。

そこへ行くと軍隊は違ふ。一から十までが整然として恰も一人の兵がゐるやうだ。それは各兵隊が自ら軍人精神に燃えてゐるからである。由來、日本軍は特に夜襲戦が得意であると言はれてゐるが、さもあらう。今宵の夜間演習など、どこに一部隊の兵が駐在してゐるかさへ分らないのである。

愈々歩哨の勤務演習が始まつた。三人哨なので兵が三人選ばれた。

——敵兵が夜陰に乗じて我に接近せんとす——といふ想定の下に歩哨の任務動作の演習である。選ばれた三人以外の兵は見學である。見學と言つても眞の闇である。歩哨の姿を見ることさへ困難な程暗いのである。

四圍を警戒し、總ての徴候に深く注意することが歩哨の最大の任務である。夜間は特に聽覺を働かせなくてはならない。その爲には或る場合などは地面に耳を押しあて、遠くから進み來る兵を判定することさへある。

私の見學してゐる場所から十米も離れたところに小さな木が數本はえてゐる。そこへ三人の歩哨は立たせられた。

愈々警戒を始めた。——と暫くすると、軽く土を踏んでこつちへ來る人のあるのを感じたらしい。

「誰か！」

どつしりとした重い聲で歩哨が誰何した。相手は假想敵である。誰何されて、

「しまった」といふ様に一散に逃げてしまった。

「さあ！ この場合どうするか」

教官の聲がした。すると歩哨の一人が

「撃つてしまふか、捕へます」

と答へた。教官殿は

「やつて見ろ」

と言つた。一人がすぐ駆けだした。

「よし／＼」

教官殿はその兵を呼び止めた。

「さうだ！ 誰何して返事のないのは怪しい證據だ。そんな時は撃つてしまふかさもなければ捕へることだ。然し敵が一人ならそれも出来るが、もし大部隊が来たらどうする」

「ハイ、その時は一人は直ちに小隊長殿なり、部隊長殿のところへ報告に参りま

す。そしてあとの一人は、その敵部隊の行動を注意します」

——そんな工合に教練は進んだ。敵襲に對する處置も教はつた。

あれ程暗かつた夜空に、どうやら一つ二つ星が見える様になつた。豫定の教育が終ると私達は草原に折敷をして車座になつた。

教官殿はその車座の真中に坐してこんなことを言つた。

「今晚の教育はこれで終つた。これから一つ化物話でも聞かせてやらう」
妙なことを言ひ出したものだと思つた。

もう點呼の頃合であらう。兵舎の窓から燈がかすかに流れてゐる——。

所もあらうに、こんな晩、こんな場所で化物の話をするといふ教官殿は何を意圖してゐるのだらう。さう言へば、昔、この草叢にはよく狐が出たものだと言ひ傳へてゐた。

「教官の家はお寺だ。御寺の中といふものはいろ／＼怖いと思はれるやうなことが澤山ある。しかし化物といふものは、この世の中には居ないかも知れない。が

靈威といふものは儘かにある。教官がまだ家にゐた時分のことであつた。裏が少し小高い丘のやうになつてゐてそこに墓があるんだ。或る月のよい晩だつた。村の若い者達がやつて來たので、遅くまで話し合つてゐた。さうだ一時頃になつたかも知れない……」

教官殿は遠い昔を想ひ出すかのやうに頸をかしげた。どんな話になるかと、恰も、街頭で紙芝居でも聞くやうな氣安な心で耳をそばたてた。

「山門の方から」からころ……からころ」といふ下駄の音が聞えて來た。靜かな夜だからハッキリと分る。ハテナ今頃誰れであらうかと話を止めてその足音を聞いた。すると庫裡を通り過ぎて丘の上の墓地の方へ歩いて行くらしいんだ。おかしいと思つて一同で出て見たんだ。しかし誰も居らないぢやあないか、唯、蒼白い月光に照されて、幾つもの墓石が並んでゐるだけだ。俺達は薄氣味悪くなつて又部屋へ引きかへした。ところが暫くすると先前と同じやうな足音が、こんど逆に上の方から下の方へとやつてくる。こんどこそ正體を見てやらうと怖いなが

らも大勢のことだから早速出て見た。矢張り何も見えない。皆はこれあ何か變つたことが起る報せではなからうか等と言ひ合つた。翌日になつて近所の人々が非業の死に方をした報せがあつたよ」

教官殿の巧な話術に私達はすっかり魅せられてしまつた。教官殿はなほも續けるのであつた。

「その人は教官の友達で、生前この友は、どつちが立派な死に方をするか競争しやうぢやあないか等言つたことまであつた。二人が死んでしまつたら誰が審判するんだと言つたら、あゝさうか等と言つて笑つたことがあつた。その男は自殺したんだ。原因が何んであつたか知らないが、その後教官は軍人になつた。これで名譽の戦死をすれば、この勝負は教官の勝になるのだ——」

一見馬鹿げた様な教官殿の話も、私達は單なる化物話として片づけてしまふ譯にはいかなかつた。教官殿はこんな暗い晩を利用して私達に死の觀念を聯想させようとしたらしい。軍人は死を怖れてはならない。しかし又他面死を怖れなくて

はならない。死に方——それこそ軍人のみではない、男子として最も重視しなくてはならない。犬死は男子として最も不面目な死に方だ。特に軍人は上 天皇陛下に捧げまつた身だ。どんなことがあつても身勝手な死にやうをしてはならない。大君の御馬前に死ぬことが男子の本望なのだ。

教官殿は暗にさういふことは私達に知らせんとしたらしい。私達は教官殿の意圖を推定して何かしら尊い哲理を發見したやうに思つた。

行 軍

私達の部隊から鹽釜までは數里しかない。或日中隊は鹽釜まで行軍を行つた。その日は風の非常に強い日であつた。暫く天氣が続いたので私達の部隊が行軍すると物凄い埃がたつた。背囊を負ひ、銃を持つて武装した私達の軍装の上に埃が灰色に積つた。

歩兵の生命は歩くことである。歩兵が歩けなくては歩兵の價值がない。だから行軍には相當重きを置く。

行軍は一口に言へば愉快なものではあるがその半面又頗る難儀なこともある。強行軍になると又一倍の苦しいことがある。然し、苦しいことも、耐へられない様なことも、結局は意志の力で克服することが出来るのである。

歩かなくてはならないと思へば、どんなことがあつても歩く。落伍しては兵として此の上もない恥辱だと思へば、少し位の困難など、精神的に克服出来るものだ。苦しいのは自分だけではない、他の兵も同様苦しいのだ。しかしその苦しみを克服して始めて一人前の軍人となれるのだ。私の先輩は、これらの艱難困苦を克服して來たのだ。

私達が部隊を出てから、道程にして約三里位は割合に坦々たる道路だつた。前にも述べた様に風が強く埃こそひどかつたが、行軍には比較的樂な日和であつた。

私達は非常に元氣だった。いつも練兵場からの歸り道に練習した軍歌が今日は實際に役に立つたのだ。私達は思ひ切つて大聲で軍歌を歌ひながら行進した。軍歌の音律は行進には誠に結構で、ともすれば亂れ勝ちになる歩調が軍歌の音律につれられて整調になり、且つ疲れて來た足取りも至極軽くなるのである。それ故に、埃の少し位は意に介せず大口を開いて歌ふのである。

田圃道は幾曲りにも曲つてゐた。私達の行進はその田圃道を曲り曲り續けて行つた。田圃に出てゐた農夫が暫し働く手を休めて私達の行進を眺めてゐた。

この曲りくねつた田圃道を過ぎると小さな部落へ出た。私達の軍歌を聞きつけて、家の中から飛び出してゐる子供等があつた。皆んな可愛い聲で萬歳を叫んでゐた——。

私達は今、得意の絶頂にある感じがした。恰もこれから戦地にでも征くかの様に心が躍つた。こんな兒童の萬歳にすら私達の心は躍るのだ。早く戦地へ行きたい——早く旗の波に送られて戦地へ征きたい——私は軍歌を歌ひながらそんな事を考へた。

を考へた。

娘達が私達の行進を珍しさうに見送つてゐた。

私は幼い頃、兵隊の姿を見ると飯を食ふのも忘れて、その後をどこまでも追ひかけて歩いたものだ。秋季演習などで兵隊が大勢やつて來て、演習する様を見て小さい胸を躍らしたことがあつた。

又ある時、兵隊さんが私の家に宿泊したりした時は嬉れしくて嬉れしくてたまらなかつた。殆んど兵隊さんにつき切りで傍を離れなかつた。

隊を出てから相當歩いた頃小休止があつた。私達は重い背囊を道端の草の上に降ろして、薄くにちんだ汗を拭つてゐた。村の子供が數人やつて來た。私達の中で一番剽輕な遠藤が、その子供等に「敬禮ッ」と言ひながら舉手の禮をしたので子供等は一齊に大聲で笑ひ出した。私は水筒の水を開けた。埃を吸つた咽喉に水筒の水は全く甘露水のやうにうまかつた。

私はもと／＼擲彈筒手なので銃は擔つていなかったが、その代り擲彈筒を背囊につけてゐた。擲彈筒はなか／＼重いものだった。入隊した當時はこの背囊を負ふのが可成苦痛であつたが、今ではすっかり馴れて、肩の痛みなど覺へることなく、却つて行軍の時などは反動がとれて調子がよかつた。

十二時過ぎ頃漸く目的地たる鹽釜へ着いた。鹽釜は三陸地方の漁港である。街には至るところに魚問屋が櫛比してゐた。私達の部隊が街の中を行進する時、先づ第一に感じたのは街中が非常に臭いことであつた。魚の生臭い香がブーンと鼻へついた。街中、生臭い様な鹽辛い様な香がしみこんでゐるらしい。

街はづれの小高い丘の上に鹽竈神社が祀られてゐた。この神社は安産の神様が祀られてゐるとの事で近郷は勿論、東京、關西邊りの善男善女の參詣が跡を絶たぬといふことである。私達は、神社の境内を借りてそこで晝食をとることにした。晝食は携帯して來た飯盒炊事である。

この丘からは海は真正面であつて、忙しきうに往き來する漁船が手にとる様に見える。

私達が背囊を降ろして炊事を始めやうとすると、近所の隣組の人達が集つて來て——私達が御飯を炊いて上げませう——といつてきかなかつた。

折角の親切に教官殿は——萬事御願ひします——と云ふ譯で、私達は持つて來た米や味噌等を隣組の人達に渡した。

海の上を吹いて來る風は、汗ばんだ私の身體にはとても心地よいものであつた。隣組の人達の親切に私達は心から感謝を捧げつゝ、食事を戴くことにした。附近のお内儀さん達がお給仕にやつて來た。

熱い味噌汁に特に私の好きな澤庵が出された。都會出身の兵達はこの澤庵をとでも喜んで頂戴した。押のよききいた、どつちかと言へば少し鹽がきゝすぎた様な澤庵は食欲を満すには十分のものがあつた。農家にとつては誠に貴重なる食糧品である。この地方の住家でも、恐らくは自家製でなく配給をうけたものであら

う。そんな貴い食糧を惜げもなく私達兵士に下さるその心に、私達は感謝せずにはいられなかつた。

軍人援護思想普及などといふ言葉を聞くことがあるが、私は今、眼前に援護の實際を見て今更援護思想の普及までもなく、日本人の誰も心の中には、言はれなくとも軍人に對する感謝の血汐が流れてゐるのだ。その感謝の血汐が、聽て軍人援護の實際となつて現はれるのだ。同じ町内から出征兵士がある時は、全部揃つて送つて行く。傷病兵があれば慰問をする——何れも強制的ではなく自發的にするのだ。誠に美しい心根だ、日本人にして始めて見る光景だ——私はこのありがたい聖代に生れ來たことを身にあまる光榮とつくづく思つた。

附近の人々の心盡しの澤庵と味噌汁の思ひがけない御馳走に、私の元氣は一度に恢復した。——サア、元氣を出して征かう。

軍歌を歌ふ私達の行進を、附近の親切な人達はいつまでもいつまでも見送つてくれた。

立派な死

いつもの様に軍歌練習があつた。草叢の上に圓陣を作り、教官殿を中央にして私達は聲を張り上げて軍歌を練習した。

忠勇奉公四つの文字

胸に刻みて鞭をあぐ

丈夫中村震太郎

行く手は暗き興安嶺

教官殿得意の「中村震太郎の歌」である。御經で鍛へた咽喉がものを言つて教官殿の聲は素晴らしいものがあつた。たうてい駆出しの三文歌手の及ぶところではなかつた。私達の聲は教官殿の美聲をあとからあとから消してゆく様なものであつた。

歌ひ終つた教官殿は今日は珍らしく興奮してゐるらしく、颯爽たる青年士官の頬が紅く染まつてゐた。

「今日はお前等に特に言つておきたい事がある。今や、戦争は刻一刻と重大段階に入つて来た。日米英決戦の時は迫りつゝある。こんどの戦争は教官が説明するまでもなくお前等がよく知つてゐる筈だ。お前等が入隊する時、既に覺悟して来た通りだ。吾々が今日あるは 天皇陛下の御爲だ。軍人たる者 天恩を忘れることはこの上ない不忠者だ。そんなことはお前等がよく知つてゐる。俺達の同僚、お前達の戦友、みんな戦地へ行つてゐるのだ。教官にも懸て戦地へ行く日がやつてくるのだ。いや教官だけではない、お前達にもやつてくるのだ。その時こそお前等が一生に一度の御奉公する時なのだ。天恩の萬分の一にむくい奉るのはその時だ。お前らはその時こそ立派に死んでくれ。軍人の最大の名譽は 君の御馬前に死ぬことだ。「死」——このことをよく胸に刻みこんでおけ。やがてお前達が戦地へ征けば必ず判ることだが、今日は特に教官がお前らに最大の餞別を與へる。

それは、お前達に「立派に死んでくれ」といふことだ——」

教官殿の熱した頬は一層紅味を増してゐた。一言一句火を吐く様である。死——そんなことは今更教官殿に言はれなくとも、十分覺悟はしてゐるものゝ、今日は何んだか特別な感にうたれて、何かしらこの胸が震へるのであつた。

「犬死をしてはならない」「立派に戦死するのだ」私は私の心にさう固く誓つた。

この事あつて暫くしてから、私達と一緒に入隊した佐々木といふ兵が陸軍病院の一室で病死した報せがあつた。

佐々木は私とは特に親しい仲ではなかつたが、それでも私はかなり好意を持つてゐた。ある夜、私が不寢番の時であつた。私は巡視中ふと佐々木の寢臺の傍を通つた。すると佐々木はむつくりと起き上つた。

「どうしたのだ」

私は思はず訊いた。だが佐々木は答へるでもなく、外套を着て便所へ行つたのだつた。

なんとなく元氣のない佐々木の姿を見て私は再び聞いて見た。

「佐々木、どこか悪いんちやあないか、悪かつたら悪いと言つてくれ」
私はやさしく聞いたのだつた。

「いや別に悪いところはないよ」

佐々木はぶつきら棒にさう答へるのであつたが、さういふ佐々木の頬は眞赤だつた。額には軽く汗の玉が光つてゐた。

「熱があるやうだな——」

「ウン、少しはあるらしい、何、大丈夫だ、すぐ直るよ」

佐々木はつとめて元氣を装つてゐるらしかつた。私はそれ以上訊ねるのもどうかと思つたので

「まあ、大事にしるよ」

と軽く佐々木の肩に手をやつた。佐々木は何んにも言はずに再び寢臺の中にもぐり込んだ。翌朝、點呼の時に私は佐々木を見た。佐々木は皆んなと同じやうに點呼をうけてゐた。——大丈夫だつた——。

私はさう思つて安心してゐた。もともと佐々木と私とは内務班が別なので、それから二、三日お互ひに顔を合せる機會がなかつたが、私はもう佐々木の事など忘れてゐた。

それから三四日たつて佐々木の班の森本から佐々木が陸軍病院に入院したことを聞いて私は吃驚した。

それから後、私は練兵場の歸りに病院の前を通る時、いつも佐々木の事を思つて通つた。——早く治つてくれ、ばよいが——。

私はさう念願した。

半月程経つた或る日、教官殿は私達補充兵を集めて、佐々木の死を報せてくれた。そして次の様に語られた。

「佐々木はつひに死んだ。彼の死は彼の責任感からだ。佐々木は風邪を引いたのだ。熱があつたのだ。然し、戦時下の教練を忘れるやうなことはしなかつた。無理をしたのだ。立派に不寝番の勤務を終へた時は、既に急性肺炎だつたのだ。それでもその日の教練にどうしても出ると言つてきかなかつたのを同年兵が班長に報告したので始めて病氣だといふことが分つたのだ。分つた時にはもう病勢はとみに進んでゐた。軍醫殿は早速陸軍病院に入院の手續きをとつた。陸軍病院に入つた佐々木は、療養の甲斐あつて一時は非常に快方に向つたが、一昨日、容態が急に變化して、遂に逝くなつてしまつた。死の床に教官は皆んなを代表して行つた。佐々木は俺の行つたことを、非常に感激して泣いてゐた。臨終が迫つた時、日頃俺が言つてゐた、立派な死に方をしろとの教訓に叛いて死ぬことが如何にも残念だ、教官殿の御教へに叛いて犬死をする。天皇陛下に對し奉り不忠の罪は何卒御許し願ひたい。七生報國といふことがあるなれば、七度生れて來て今日の犬死の不名譽を回復したい。どうか同年兵の皆んなに宜しく御傳へ下さい。

——と、いふやうな悲壯な言葉を残して死んで行つた。おれはそれを聞いて獨り泣いた。よい部下を殺して教官も残念だ。教官は常日頃から、軍人は死場所を得ることが肝心だと教へた。佐々木は病院で死ぬことをこの上ない不名譽だと心得てゐたらしい。それは、佐々木としては戦地で堂々と死にたかつたのだらう。佐々木の心はよく分る。然し翻つて佐々木の死の原因を考へるに、病氣を押して不寝番勤務をやつたことによるのである。すれば、佐々木の死は決して犬死ではない。寧ろ、兵として與へられた勤務を怠らず完遂したその精神、その崇高なる精神には自ら頭の下るものがある。佐々木のこの熱烈なる軍人魂は戦地にゐて堂々敵を仆しつゝ討死したことゝ變りない。この上は佐々木の死を立派に飾つてやるには、お前達が一刻も早く立派な兵隊になることだ、佐々木は又それを死ぬ直前まで言つてゐたのだ」

教官殿の頬には一筋二筋熱いものが流れてゐた。人情教官として知られてゐた教官殿だ。よい部下を殺して残念であらう。

私は不寝番だったあの晩の佐々木の態度が目には泛んで来た。佐々木は既にあの時は肺炎にかゝつてゐたのだ。何故もつと早く軍醫殿に診て貰はなかつたのだらう。教官殿が言はれた様に、責任が強かつた事は軍人として全く敬服するが、さりとて 天皇陛下に捧げまつた身體を病魔のため侵されたことは佐々木も残念であつたらう……出来ることだつたら戦地で華々しく戦死させてやりたかつた……私の目頭からはいつともなく熱い……ものが流れて来た。

教官殿の言葉に、こゝかしこで嗚咽が聞えた。

かつては「立派に死んでくれ」と兵隊に教へた教官殿の眼には、たとへ病死であつても勤務に倒れた佐々木の死は「立派な死」と映じたことであらう。

佐々木の遺骸が茶毘は附せられる時刻に、私達同年兵は、暫し教練をやすんで火葬場の方に向ひ、捧げ銃を行つた。

——佐々木よ、安らかに眠つてくれ。

私は心の裡でさう叫んだ。

軍隊の味

班長殿

私の軍隊生活はあまりにも短いものであつた。それだけに眞の軍隊の味を語るには相應しくないかも知れない。然しその短い日時の間に、私の思ひ出は恐らく一生を通じての思ひ出の量と同じ位あるであらう。若し思ひ出を入れる靴でもあつたら、それこそ、私の軍隊に於ける思ひ出はその大靴に何杯も何杯もつめられたことであらう。すい分失敗もした。その都度班長殿に叱られたこともあつた。然しその失敗、その苦勞も、みんな楽しい思ひ出となつた。恐らく私の生涯を通じての思ひ出であらう。私は今、それらの思ひ出の中から二三を拾つてみる。軍隊へ入れば子供と同じやうな氣分になる——甘いものがたまらなく欲しい。